月刊ナイトバグ　雨天決行防水加工型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2010年 6月号
傘キャラ大増祭り！　蛍据え置き！
「梅雨特集」
読切り作品
SS　:Salka/如月翔/悠奈/
漫画:ぼこ/キッカ/くらげん/preudenano/
羅外/秋水
連載作品
SS　:壁々/夏樹 真
漫画:Step/草加あおい/ひどぅん/

Cover design　小崎

目次 (3p)

東方郵便娘

～頑張れ、妖怪娘～

著者：Salka

最近、人妖問わず（但し一部に限る）人気を集めるという屋台がある。売りに捌くは八目鰻。周辺で聴こえる夜雀の歌でかかってしまう、鳥目によく効くと評判だ。
　もっともその店主―ミスティア・ローレライが夜雀なのだが。
　今は歌で客引きをすることがなくとも、酒と肴を求めて様々な客がやってくる。噂はたちまち広がり、店主がとある月夜に出会った物騒な連中まで客としてやってくることもあった。
　そんな屋台だが、貸切になることもしばしば。貸切相手は店主の友人たち。現在座っている順に左から、化け猫の橙、蟲妖怪のリグル、湖の大妖精、氷精チルノ、宵闇の妖怪ルーミア。普段集まって遊んだりたまに神社などに悪戯をして巫女に怒られたりする関係である。
　子供だということもあり呑む者は居らず、銘柄を見分けるために色紙を貼って区別してある酒瓶はひとつも空いていない。カウンターに並んでいるのはいつだったか巫女が代金代わりに置いて行った茶葉から淹れたお茶で、チルノ曰く「まずい、もう一杯」だそうな。ちなみに大妖精、リグルを挟んだ彼女のふたつ向こうでは橙が必死にコップに息を吹きかけていた。
　楽しい談笑が続く中で、ふとしたことから話題は「仕事」のことになる。ミスティアの屋台が最近上々でいいだの、商売敵とはどうだの（そもそも、竹林が焼き鳥のメッカと言われているだけで焼き鳥屋台があるなんて話は聞いていない、とリグルが呟くが誰も聞いちゃいない）、橙は最近、主人の藍の手伝いをするようになり、大きな仕事を任される日も遠くないかも知れないだのと。
　そうして、一同が次に目を向けたのは、左から二番目に着席している、リグル・ナイトバグであった。
　リグルは以前、烏天狗のブン屋から「蟲の知らせサービス」を取材され、新聞に紹介されたことがある。新聞の効果はあまりなく、実際のところ本人があまり面白く思わずに止めてしまった。だがそれは過去の話で、今リグルは新しい仕事に手を付けている。とある目的で。
「リグル、郵便のお仕事はどうなの？大変？」
　大変興味津々な顔をリグルのほうにぐいと向け、橙が訊ねた。
「うーん、別にそうでもないよ。お客さんも少ないし、慧音先生がやり方を考えてくれたお陰で、すごくやりやすいし」
「どうせすぐ飽きちゃうと思うんだけどなー、リグルのことだし」
　串に染み込んだたれの味を堪能したいのか食べた後の串をしゃぶりながら、ルーミアが呑気に言う。
「飽きちゃったらやめたいところだけどねー……そういうわけにもいかないの」
　リグルが現在の仕事をするには先にも述べたように目的がある。
　その現在の仕事が「蟲の郵便サービス」なる事業だ。幻想郷の各地に、忙しい人に代わって手紙を運ぶ、郵便屋さんなのである。
　利用者が人里に多いこともあって、リグル自身は夜行性だが仕事は昼間行っている。とはいえ仕事量としては全然負担になるものでもなかった。
「あ、そうだ」
　そこで、店主のミスティアがぽんと手を叩く。
「手紙といえばリグルにお願いがあるんだけど」
「手紙といえば……って、手紙に関すること

なら何でもってわけにはいかないよ？」

つい最近、リグルは手紙繋がりで人探しまがいのことを引き受け、最終的に遺書を配達する羽目になったことがあった。それを思い出し、彼女は予め釘を刺した。

「これ、読めない」

ミスティアが傍にあったお絞りで手を拭いて取り出したのは、一枚の折りたたまれた便箋だった。

読めない、というのはそのままの意味で、ミスティアは識字が苦手で文章は壊滅的に読めない。先にも酒瓶の銘柄が分からないとあったのもそれで、そのための色紙を貼っての区別である。

「……読むだけなら他の誰でも頼めるでしょ」

「それはそうなんだけど、やっぱ手紙のことだからリグルかなって」

見当違いもいい所だ。リグルが溜息をつき、両サイドから橙と大妖精が優しく肩を叩いた。

「言っておくけど、これは私が配達したんじゃないからね。私が配達する手紙は、封筒っていう紙袋に入ってて、料金を出したっていうスタンプが押してあるんだから」

成る程、リグルがミスティアから受け取った手紙は、丸裸の便箋で封筒に包まれていない。念のため大妖精が「何かに包んであったの？」と横から口を挟んだが、ミスティアは首を横に振って「このままで、寝ている間に屋台に置いてあったの」と付け加えた。

「じゃあ、読むよ」

＊

—ミスティア・ローレライ様

いきなりのお手紙、失礼します。

私は幻想郷のあちらこちらをうろついているちょっとした妖怪です。

あなたにどうしても伝えたいことがあって、お手紙を書きました。

この間、私はちょっとしたことがあって、すごく落ち込んでいました。

それで、自分はなんてみじめで、ダメな妖怪なんだろうな、と思っていたのです。

そんな時、たまたま通りかかったところで、あなたが歌っているのを聞きました。

まわりにはあなたのお友達がいて、バカにしているようでしたが、あなたはそれでも歌っていました。それがすごくかっこいいと思いました。

それからあなたがその友達のひとりと弾幕ごっこを始めて、あなたがやられそうになったのを見て、私はダメな自分をつい重ねてしまいました。

でも、あなたはそれでも歌っていたのです。

あなたがどんなに負けそうでも歌っているのを見て、私は勇気が出ました！

ちょっとやそっとダメだったくらいで、くよくよしている場合じゃないんだって思って、元気も出ました。

私に勇気をくれた、ミスティアさんの歌が大好きです。

これからもがんばって下さい！応援してます！

＊

「差出人が分からないね」

リグル達は手紙を何度も読み返し、何度も目を上下左右に往復させたが、差出人の名前らしきものは、どころかそのヒントとなる情報すらどこにも無かった。あちこちをふらついている妖怪というのが唯一の情報だが、はっきり言って妖怪は寧ろどこかに所属しているほうが珍しく、リグルやルーミアのように野良が一般的だ。

「まぁ、ここのどこかにミスティアの歌のファンがいるってことでしょ」

「いい事じゃない」
「すごいなーあこがれちゃうなー」
半ば茶化しつつも（まぁ、手紙にある「お友達」の該当者だからということもあって）、素直に褒めるリグル、橙、ルーミア。だがミスティアはまだ納得のいかない顔をしている。
「うーん……褒めてもらったのはわかったけれど、やっぱり誰か気になるわね」
そして、リグルを一瞥。
「リグル、調べてよ」
「……はぁ？」
この友人は一介の妖怪に過ぎない私を菩薩か何かと勘違いしているのか、それとも郵便サービスを便利屋みたいなものだと思っているのか、友人だからって何でもしてくれると思っているのか、などという疑問が次々とリグルの頭を駆け巡る。
そんなことは自分でやればいいじゃないか。と心の中で文句を言う。
「そんなの自分でやればいいじゃない」
口に出してしまった。
「えー、だって最近屋台が繁盛で忙しいんだもん。どうせあちこちうろついてるんならリグルが最適じゃない。ね！お願い！どうしても会いたいの！」
「私もそれなりに手伝ってみるから……」
ミスティアがリグルの肩を引っつかんで揺らし、不憫に思った大妖精がフォローに入る。ケンカ腰になりかけていたリグルはなんとか落ち着きを取り戻した。つい気が立ちやすいのもまだまだ彼女らが子供だということだ。
「ま、それなりに探してはみるけど、この幻想郷でひとりの妖怪を探すなんて難しいものだし、期待はしないでよ」
友人相手に意地を張ることもないし、別に負担なことでもないわけで、リグルは結局引き受けることにした。

＊

数日後。
ここ数日の間、配達が終わってからちらほらと情報を集めたりしていたリグルだったが、全くもって有力な情報は得られなかった。
やはり幻想郷は広い。
と、もうそろそろ見切りをつけて諦めさせようか、とも考えながら、のんびり森の中を歩いて屋台へと向かう。仕事帰り、郵便屋の証である赤い腕章と帽子はそのままで。
「うらめしや～！」
「ひぇぇ」
唐突に背後から威勢のいい声を出され、度肝を抜かれたリグルは思わず飛びあがる。鼓動が一瞬止まった勢いで大袈裟に早鐘を打ち、息が詰まった心臓は直ぐに肩を上下させながら荒い呼吸を続けた。
呼吸が落ち着きを取り戻したところで、くるり。背後を向く。
「……びっくり」
驚かした本人が何を言うんだか。
肩の上くらいの水色の髪に、左右で色の違うオッドアイ──は今真ん丸に見開かれている──、そして大事そうに抱えている、茄子色の化け傘。
間違いなく妖怪だ。
「あ、あなた誰？」
「私は小傘……多々良小傘！まさか驚いてもらえるなんて……今とても感動しているよ！ってあら？もしかして妖怪……なぁんだ」
一度は目を爛々と輝かせていたが、リグルの頭、帽子の穴からにょっきり顔を出す触角に気付くや否やがっかり顔。
「妖怪で悪かったね。でもあなたも妖怪なんでしょ？」
何となくがっかりされたことが気になったリグルはそれとなく皮肉っぽく言い返した。

「そ、妖怪よ。人間を驚かせるのが妖怪の役目だもんね。でも最近人間が驚いてくれなかったからなぁ……お陰で馬鹿にされちゃって」

　思い出したのか、しゅんとする小傘。その姿がどこか可愛らしい。

「そりゃ難儀だったね……」

　といってもリグルは周囲が周囲なもので、特にチルノからはよく馬鹿にされるのだが。その度に「あんたに言われたくないよ！」と返すのももうお決まりの日常であったりする。それでも落ち込む小傘を見ていると同情せずには居られないものだ。

「それでも諦めないと決めたんだけどね。それもこれもあの時の歌のお陰なの」

　再び元気な顔に戻る小傘。なんとも表情の豊かな娘である。

「あの時見つけたミスティアさんの歌があったからこそ諦めずに済んだのよ。だから人間を驚かすまでまだまだ頑張るんだから」

「……え、ミスティア？」

　リグルはそこではっと気付く。ミスティア。歌。挫けた心、取り戻した勇気。

「見つけたぁ！」

「はいっ？」

　勢い余って指まで差してしまう。その指の先で今度は小傘が呆気に取られぽかんとしていた。

「この手紙を書いたのはあなただ！」

　犯人を指名する名探偵のノリ（別に麻酔銃に撃たれたわけでもないしじっちゃんの名に賭けてるわけでもないが）で手紙を突きつけた。

「わ、私の手紙！どうしてあなたが！」

　こうして判明した犯人もとい小傘が驚きに声を上げる。確かに偶然通りすがりを驚かした妖怪と、手紙を宛てた相手が友人なんて思うまい。いやそれにしてもノリがいいのかまぁオーバー気味なリアクションだが。

「ミスティアは私の友達だよ。ちょうどミスティアに頼まれて、この手紙の主を探していたの」

「なるほど、ミスティアさんの友達……ああ！そういえばあの時いたような……いなかったような」

　その時の小傘にとってミスティア以外はどうでもいいらしかった。

　曖昧に言葉を濁されてリグルもちょっとしゅんとなる。「うー……」と短く唸った後、

「まぁそう思われても仕方ないのかな。私はリグル。リグル・ナイトバグ。さっきも言ったけどミスティアの友達だよ」

　気を取り直して名前を名乗った。

「あの、ミスティアさんは怒ってなかった？名前も書いてないし、ちゃんと伝わったかな……」

「ミスティアでいいよ。あいつはそこまで偉い妖怪でもないし。……手紙のほうは喜んでたよ。でもミスティアは文字が読めなくて……そこは小傘には誤算だったかな？あ、私が読んだから内容は伝わってるよ」

「あ、そうだったんだ……しゅん」

「……そういうわけで手紙じゃあいつも分からないし、お友達になってあげたら？ミスティア、すごく会いたがってたからさ」

　自分のやったことが実は手段としては意味がなかったと知って落ち込む小傘に、リグルは優しく声をかけて本題に入る。

　手紙の主に会いたい。肩をがくがくと揺らして懇願したミスティアの願いが、叶うチャンスが来たのだ。

　しかし、返ってきたのは意外な返事だった。

「うーん……遠慮しとくわ」

「えっ？」

　何かまずいことでも言ったかとリグルは発言を思い返す。しかし特に覚えは無い。

「ミスティアさんへの憧れの気持ちで十分よ。まだまだ、人間を驚かせ足りないし……ミスティアさんのように胸を張れる妖怪にならなきゃ」

「今でも十分だと思うけどなぁ。私驚かされちゃったし」

「ううん。それにたまたま通りすがっただけの妖怪だもの。だから気持ちを伝えただけで本当にいいから」

　小傘は水色の髪を振り乱す勢いで首を横に振った。流石にそこまでされてはリグルも無理にとは言い辛い。

「そ、そうなの……。じゃあ、また何かミス

ティアに伝えたかったら、手紙でいいから私に言ってよ」
「うん、有難うリグル！」

*

「むりやり引っ張ってくればいいじゃない」
……嗚呼。この馬鹿の前で話すべきじゃなかった。あっさりきっぱりと言ってのけたチルノを見て、リグルは嘆息するのであった。

結局隠すのは小傘に悪いし、気持ちだけでも伝えようと思ったリグルはミスティアに折れてもらおうと思って、小傘の言葉を正直に伝えた。
まぁ小傘も無碍にしているわけではないし、ミスティアも嫌がる小傘を無理には連れてきて欲しくないだろう。残念かも知れないがまたの機会に、などと楽観視していたからだが。というよりそれで終わるのが普通だ。

チルノさえ居なければ。

いや、チルノも悪気があって言っているわけではない。単に友人であるミスティアの好意を断るのが不服なだけだ。
分かっているからこそリグルはそこから話を進めづらかった。
「でもチルノ、別に本人が行きたくないって言ってるのを無理に連れてこなくても……」
「何よ、やましいことでもあるの？無いんならくればいいのよ。みすちーだって会いたいって言ってるじゃない」
こうなったらチルノも止まらない。リグルはチルノの説得を諦めた。
「い、一応もう一度伝えてくれないかなぁ……」
それまで特に何も口出ししていなかった当人のミスティアも、遂に折れてリグルにぼそぼそと耳打ちした。
リグルも頑固になるだけ無駄だと判断し、頷く。
とはいっても今彼女に何かいい考えが浮かんでいるわけでもない。

ミスティアと小傘。どうにか上手いこといかないものかと頭を抱えながら、リグルは屋台を後にした。

*

翌日。寺子屋の依頼で多数の郵便物の配達があったこともあり、初夏の太陽はまだ高くあったが既に時刻は午後五時をまわっていた。
ミスティアの屋台は午後七時に開店するのでまだ余裕がある。リグルはもう一度小傘に会って説得を試みようと、前日小傘と会った付近をうろついていた。

「うらめしや～」
「ひぇぇ……ってまたなの小傘……ってひぇぇ！」

振り返ったリグルの目に映ったのは、見たことも無い蟲だった。
蟻の頭に蝉の口、蛾の羽をはやしたボディは蟷螂に近い。それでもって、腹部は幼虫のようなぷにぷにとした見た目をしている。
そんな奇っ怪な蟲を前に、リグルは完全に度肝を抜かされ、腰が抜けた彼女はその場にへたり込んだ。
「やっだ、そんな大袈裟に驚かなくてもいいのに」
その蟲から聞こえてくる、全く持って不釣合いな少女の声。すぐに蟲の姿は揺れ、一匹の蝿が現れる。

その後ろに、声の主らしき人物……いや、妖怪がいた。黒い髪に黒い服、赤と青の奇妙な羽が生えた少女。
　少女は完全に地面から立ち上がれず呆然とするリグルを見て、にやり、と笑った。
「小傘だと思ってたでしょ」
「そ、そりゃだって……」
　乾いた喉からやっとの思いで搾り出すようなリグルの情けない声。少女はからからと笑ってそんなリグルを見る。
　少女の口から小傘という名前が出た（というか驚かす時の決まり文句が全く同じ）ということは、彼女は小傘を知っているのだろう。
「小傘の知り合いなの？」
「知り合いっていう知り合いじゃないけどね。ただちょっとした関係なのよ」
　知り合いっていう知り合いじゃない「ちょっとした関係」って一体何だと思いつつもリグルはそれを口に出さなかった。出せなかった。
　あまりにも先程の謎の蟲のインパクト、というか最早トラウマである。それが強すぎてひけた腰が上がらないのだ。
「私は封獣ぬえ。ぬえでいいわよ。なんか悩んじゃってる風だから気になったけど、私でよければ相談に乗ろうか？」
　怪しすぎる。
「って、いきなり気味の悪いもの見せ付けてこんな事言っても信じちゃくれないよねー。さっきのはちょっとした悪戯だったんだけど」
「一体あれは何だったの……」
「あれは私の能力でちょっと目の前の蝿を正体不明にしてやっただけなの。どういう原理かは正体不明、ようは禁則事項なんだけどね」
　ばっちりウインクまで決めて説明してくれたぬえだが、リグルにはいまいち理解できない。ただでさえよく分からないのに、加えてリグルは頭が少々足りない部分がある。
　それでもぬえに悪意を感じないと思ったリグルは、警戒を解いてようやく腰をあげた。
「うん、その、実は……」
　リグルは、ぬえに今抱えている悩みを話した。小傘とミスティア、どうすれば二人とも納得できるのか……。
　ぬえはふんふんと頷きながらリグルの話を全部聞き、しばらく考え、ポンと手を叩く。
「だったら私にいい考えがあるわよ」
「えっ、本当に？」
「ええ、私に任せてよ。それじゃ、話すわね……」
　ぬえに引っ張られてリグルの耳にぼそぼそと作戦の全容が伝わる。
　事細かな説明まで聞いた上で、ぬえはリグルに確認を取った。
「小傘の意志をちょっと無視しちゃう形になるけど、これがいちばんベストだと思うの。どう？」
「うん、やってみるよ……こうなったらちょっと友達にも相談してみなきゃ」
　リグルはうんと頷いて、ぬえと視線を合わせる。ぬえの不敵な笑みがどこか頼もしく感じた。

＊

　作戦決行の手前、リグルはチルノ、ルーミア、大妖精に協力を得るべく三人をこっそり呼び出した。
　ぬえから伝えられた作戦を話しつつ、リグルは更に念を押して釘を刺した。
「いい？絶対に手出さないでよ？」
　相手がチルノであるだけに、リグルの釘刺しには力が入る。しかしチルノは嫌そうな顔で「あたいが分からないわけないじゃん」と言いたげだ。
　何せ好奇心が強い上にお祭り騒ぎが大好きなのがチルノである。作戦に水を差すというハプニングは容易に想像し得る。
「ルーミア、大ちゃん……チルノのことよろしく。多分どうしても混ざりたくなっちゃうだろうから、全力で止めて」
「う、うん……」
「だから、あたいはちゃんと分かってるって

ば！」
　いまいち信用されていないチルノが手足をじたばたしつつ大妖精に押さえられている隣で、ルーミアは何を考えているのか全く分からなかった。

＊

　屋台の準備を終えたミスティアが、火を起こす薪を拾いに森へと入る。鳥目効果のないただの鼻歌を添えて。ご機嫌だ。
　しかしそのご機嫌もそこまでだった。
「はぁい、そこの可愛い夜雀ちゃん」
　唐突に声をかけられたミスティアが振り向けば、そこには近隣では見慣れない黒髪の少女。
　蛇の巻きついた得物を握りしめて妖しく笑う、その立ち姿から漂うは正体不明のオーラ（って何だよ）。
「唐突だけど私と遊んでいってよ」
　言うや否や、少女はミスティアに向かって軽く弾幕を飛ばす。弾速が緩かったので、ミスティアは辛うじて避けることができた。
　転びそうになった体勢を立て直し、完全に少女に向き直る。
「な、何なのよあなた！こんな森の中でまだ日も沈まないうちから可愛い妖怪を捕まえて！」
「自分から可愛いって言うの？おかしな子。別にいいじゃないちょっとくらい……さ」
　光弾を従えたかた思いきや、それはいつの間にか未確認飛行物体へと姿を変えていた。
　負けじとミスティアも弾幕を張って対抗する。が、基本的にミスティアは相手を誘って鳥目にするのが得意戦法で、真正面からぶつかるのは苦手なほうだ。
　案の定弾幕の濃さで競り負けているミスティアは、相手の未確認飛行物体をかわすので精一杯だ。
「どうして、どうして私がこんな目にぃ〜」
　窮状にしては些か緊張感が足りない声が、森に響いていく。
　しかしそんなミスティアを助けてくれそうな人影など、もちろん見渡す限り存在しなかった。

　見渡す限り。

「ぬえは上手くやってくれてるみたいだし……私も行かないと」
　ぬえが計画通りミスティアを襲うところを草叢の陰から確認したリグルは、音を立てないように慎重にそこから抜け出した。
　リグルの目的はここで待っていることではない。
　呼ばなければならないのだ。もう一人の主役を。
　走れメロス……もとい、リグル。
「小傘！ちょうど良かった……助けて！」
「あ、リグル？どうしたの？息なんか切らして」
　何も知らない小傘が、頬を赤くして走ってくるリグルを呼び止める。
「大変なの！私の友達が、突然知らない妖怪に襲われて……お願い、一緒に助けて！」
「何だか大変なことになってるみたいね……分かった、私で良かったら協力するよ！」
　慌てふためくリグルに小傘も気が気でなくなる。強く頷いて返事をすると、リグルに道案内を頼んだ。
　急がねば、と言ってリグルは小傘を連れて来た道を引き返す。
　森へと入っていき、そこで……。

＊

「あたい、参上！」
　ま た お ま え か。颯爽と現れたチ

ルノに、リグルは草叢の陰から溜息をつく。何のためにさっき釘を刺したんだ。というかルーミアと大ちゃんはどうした。

「私もー」

　おまえもか。ルーミアがチルノと同調して出てくるのを見て、リグルの溜息は最早歯軋りへと変わっていた。隣で事情などあまり知らない小傘が不思議そうにリグルを見ている。

　しかもそれだけではない。二人がカタンしたのは何と、まさかのぬえサイド。何を考えている、ミスティアは二面ボスでそっちはエクストラボスだ、とは言わずとも、ミスティアを圧倒的に不利にしてどうする。

　これでは小傘と自分がミスティアに味方して勝てるかどうか……。

　ちなみに大ちゃんは、リグルがスタンバってる辺りに向けて、必死で頭を下げていた。どうやら彼女一人の手には負えないらしい。

「あ、ミスティアさん……」

　小傘がミスティアに気付く。だがその直後、彼女は固まってしまった。

「あの、ミスティアさんを襲ってる、黒髪の……」

　そういえばぬえは小傘を知っていたし、何らかの関係があるように言っていたような、とリグルは悠長にそんなことを思い出す。だが隣の小傘は何故かしどろもどろになり、怯えている風にすら見えた。

「小傘？」

「だめ、やられちゃう……ぬえはとっても強い妖怪なんだから」

「それは、その……」

　ぬえとガチバトルをしたわけではないリグルにはぬえの強さなんてものは分からない。が、小傘がしり込みするからきっと強いのだろう。そういえばぬえが作戦を説明する時『小傘は自分を見て踏み出す気が失せちゃうかも知れないから後押ししてあげて』なんて言ってたような気もする。それを思い出し、リグルは小傘を後押ししようと言葉をかけた。

「でも、このままじゃミスティアが危ないし……」

　現にミスティアは完全に追い詰められていた。予期せぬチルノとルーミアの乱入で三対一になっていて、ぬえがかなり手加減しているが消耗しかけている。

　自分が小傘と一緒に加わっても、下手をすれば負けるかも知れない……リグルの中にふとそんな考えが浮かぶ。俯いて、やめようか、そんな心の中に浮かんだ誘惑に釣られかけて。

　それでもリグルは、首を横に振った。

「私、ミスティアを助けるよ」

「え、え、えぇ？」

　覚悟を決めたリグルが飛び出す構えを見せて、小傘は慌てた。

「確かにあのぬえって妖怪は強いかも知れないけど、でも……何もしないでミスティアがやられちゃうの見てられないし。

　それに、踏み出す勇気から始まることって、あると思うから。

　だから、私行くよ。きっと小傘だってできるよ。だって、自分の気持ち、手紙にして伝える勇気があるんだから」

　言い捨てて、強く、確かにその足跡を残すように、一歩、確実に、強い意志を持って、

—踏み出す。

「くぉらぁ！そこの馬鹿妖精と気まぐれ妖怪と正体不明！三人で寄ってたかってミスティアをいじめるとはいい度胸じゃない！」

　飛び出した拍子に脱げた帽子がふわりと舞って、草叢の陰に落ちる。

　マントが風に翻り、僅かに差し込む夕陽に頬を照らされたリグルの姿は頼もしい。

　そのリグルが残した帽子を手に、小傘が息を飲む。

「うらめしや〜！じゃないけど、私も加勢するよ！」

　気がつけば、小傘は無我夢中で飛び出していた。一心同体の茄子色の傘が風の抵抗を受けて、ふわり、とゆっくり着地する。

　チルノとルーミアに容赦なく攻撃されて消耗しかけの夜雀と、弱い弱いと馬鹿にされている蟲妖怪。そして、踏み出す勇気をもらった、唐笠お化け。面子としてはどこか頼りない。

だが、今なら勝てそうな気がする。リグルも小傘もそんな気がした。
「裏切り者には蟲の制裁を……『バタフライストーム』！」
「『超撥水かさかさお化け』！」
「『梟の夜鳴声』！」
　助っ人が入ったことで持ち直したミスティアも加えて、堂々の反撃が始まる。
「何をぅ！『アイシクルフォール』！」
「『ディマーケイション』！」

＊

　空が薄暗くなる頃、七人の疲れ果てた少女達が森の開けたところに輪になって寝転んでいた。
「……何よ、あんた最初からやる気無かったでしょ」
　横で寝転んでいるぬえを軽く睨みながら、チルノ。
「別に。だって最初からからかうつもりだっただけだもんね」
　平然と返す、ぬえ。
「チルノちゃんだって約束を破ったんだから、文句を言わないの」
　ぬえと反対側のチルノの隣にいる、仲裁に入ろうとして結果的にミスティアに加勢することになった、大妖精。
「もう～一体何なの？」
　最初から何も知らされていなかった、ミスティア。
「うう、よく分からないけれど、これでいいのかな」
　同じく、小傘。
「楽しかった」
　スペルカードが真っ先に尽きて離脱したので比較的無事なルーミア。
「……はぁ、もう……」
　散々引っ掻き回したチルノ達に溜息しか出ない、リグル。
「……あの」
　そこでミスティアが、初めて小傘に声をかける。
　小傘はひっくり返った声で「はい！」と返事をしつつ、ドキリとしたのか肩をびくつかせた。
「助けてくれて有難う。たまたま通りがかっただけだよね？あなた、すっごく優しいんだね！」
　彼女が手紙の主だと知らず、ミスティアはただただ嬉しそうに自分の感謝の気持ちを告げる。小傘の心など知らず。
「わ、私は……」
　言葉に迷って、口の中で言おうか言うまいか迷って、視線を泳がせる。その小傘の赤と青の眼が、リグルの緑の眼と合う。
　リグルの眼はどこか温かく、心強く感じられた。
「ミスティアさんのこと前から知ってたの。あの手紙は私が出したから……」
「じゃあ、あなたが小傘ね！わぁ、初めまして！あなたに手紙をもらってから、ずっと会いたかったのよ！」
　願ったり叶ったり、本当に嬉しそうにミスティアは小傘に飛びつく。小傘は嬉しいやら恥ずかしいやらで、はにかみながら視線を反らした。
「それに、お礼ならリグルに言うべきだもの。ミスティアさんが襲われていたとき、私は相手が相手だから無理かもって、ためらっちゃったし」
「私はいいよ。裏でこそこそやってたんだからこれくらい当然だし、それに引き分けにできたのは小傘が頑張ったからだよ」
「うん、とにかく有難うね、リグル。それに小傘。……ねぇ、私は手紙は読めないけれど、あなたと沢山お話がしたいの。私を助けてくれたあなた、すごくかっこよかったから……ね？」
　ミスティアは爪を当てないように気を遣いながら小傘の手をそっと握った。
　かっこよかった。その言葉が小傘の胸に響く。
「……うん！」
　その手を握り返し、小傘は頷いた。
「やったぁ！自慢の鰻を沢山ご馳走しちゃう

わね♪ねぇ、友達だからミスティアって呼んでよ。堅っ苦しいのは抜きにして」
「う、うん……ミスティアさん……ううん、ミスティア。これからもよろしくね」
「よろしく!」

＊

「めでたしめでたし……かな」
　夜。何だかんだで引き分け記念（?）にミスティアが気前よく鰻を振舞ってくれたので、ぬえと小傘、そして遊びに来た橙も交えて屋台は大賑わいだった。
　そんな中、熱気に当たりすぎたから少し席を外すと言ってリグルが外に出る。するとぬえもその後を追って外に出てきた。
　満点の星空の下、ぬえが笑顔でぽつりと呟く。
「まぁ、チルノは本当いい意味で誤算だったけれどね……あいつは良くも悪くも調子狂わせちゃうんだから」
「そうなの? 私そういうの好きだけどな。ストレートに事がうまく運ぶのは面白くないし」
「うん、なんかぬえってそんな感じだよね。会ったばかりでこういうこと言うのもなんだけどさ」
　リグルの言葉に「そうかもね」とぬえは軽く笑う。
「ま、今回はちょっと上手く運んでくれないとこっちとしても困ったんだけどね。……ねぇリグル、問題解決に手を貸した代わりにちょっとお願いがあるんだけど」
「お願い?」
「実はさぁ、小傘があんな風に落ち込んだの、私が面白くてからかったらやりすぎちゃったからなんだよね。それで聖にバレて怒られてさぁ……『全くあなたは。ちゃんと反省しているのであればその妖怪を助けてあげなさい』って」
　あんただったのか。ツッコミは心の中だけに留めておく。
「でさ、こうして問題は解決したわけだし……ひとつ、ここは聖に口利きしてくれないかな?」
「は、初めからその目的だったのね!」
「そんなわけじゃないけど、ほら事のついで、ね!」
　両手の平を合わせて「お願い!」としつこく頼んでくるぬえ。断るわけにもいかず、リグルは「わかった、わかったから……」と呆れながらも了承した。

　屋台では、鰻を片手に小傘が、楽しそうにミスティアと談笑していた。

—完—

後書き。時間がないので箇条書き。
・ま た 遅 刻 か
・今回ネタ多くてすみません
・郵便娘である必要なくね↓すみません本にするときにはちゃんとその辺肉付けします
・執筆は計画的に
・二ボス多い
・ぬえとか小傘のキャラがよくわからない
・小傘に至っては一人称がどっちか分からない
・いざ、倒れ逝くその時まで（原稿的な意味で）
・そんなこんなで何とか六月号もできた↑できてねぇ

さいか拝

ずっと一緒に

～ the last 60sec.

著者：壁々

59

霊夢の周りに８つの陰陽玉が突如として現れた。同時に霊夢が接近開始。１秒を惜しむ加速にもしっかり対応。

58

おちついて防御壁を展開。霊夢の左からの払い。

57

続けて、左。右の玉串の突き。若干押し込まれたけど、大丈夫。

56

防ぐだけなら。一分防ぎきるだけだというなら、十分出来るはず。

55

再度接近してくる霊夢に、気を引き締め直して防御壁を再展開。直後、霊夢が視界から消えた。

54

え!?と思うと同時に、無警戒だった足に鈍痛。痛みで体が硬直する。

(…スライディングで足を!)

気づいて下を見ようとしたら、突き抜けるような衝撃が首から上を襲った。

53

顎に放たれた一撃は私の意識を体ごと吹き飛ばすに十分な破壊力。重力に支配された私の体は容易に霊夢の追撃を許した。

52

追撃の痛みに悶絶しながらも、なんとか意識は回復。とっさに受け身をとって後方に飛び下がり、転倒を免れる。

51

(相手の姿をよく見ろ!眼を閉じてちゃ闘えないだろ!)

痛みで閉じてしまった眼を自分を叱咤して強引にこじ開け、霊夢を見据える。しかし、霊夢の追撃は容赦なく、すでに眼前に札が放たれていた。

50

驚きも数瞬、なすすべもなく直撃を受けてさらに後方へと吹き飛ばされる。今度は受け身も間に合わず、完全にダウン。

49

(圧倒的だ…１０秒くらいの攻撃でもう、４発も直撃を受けた…)

すぐにはね起きるも、頭をよぎる力量差。構えをとるも、どうすればいいのか、考えがまとまらない。しかし、それでも二つの事実だけははっきりと認識できた。

48

(…霊夢の周りに浮いている陰陽玉が光ってる…)

まず最初に気づいたのはそこ。おそらく、すべての陰陽玉が点灯した時、「何か」が起こるのだろう。霊夢が必勝を確信している「何か」が。そして、ほぼ同時に２つ目の事実にいきあたる

(……点灯してるのが……１、２、…３?)

47

そうか。あれは直接攻撃でのみ点灯するのか。遠距離攻撃では発動できない。だからこそ霊夢はすぐに接近戦を挑んできたのか。

そこに思い当たると同時に、距離をおいていた霊夢が再びこっちに近づいてきた。

(…なら!)

それに気づくと同時に、私はバックステップでつめられた分の距離を開ける。直接攻撃があたりさえしなければ、この場は問題なく終われるのだから。

46

霊夢は私が引いたのを見て、一瞬驚いたような顔をした。そして、すぐに表情はもとに戻り

上を、向いて、重心を、落とした。

(・・・?~~っ!)

その瞬間。私はある事実に気づいた。否、思い出した。

45

私が逃げたら。私が霊夢と勝負することを放棄したら。もし、霊夢にそうみなされたら。霊夢は躊躇わず私を無視して人里へ向かう。私の目的は霊夢を止めることでも、霊夢の目的は私を止めることではない。あくまで異変の解決なのだから。

(逃がせないんだから…立ち向かうしかないじゃないか!)

44

霊夢が上空に踏み切る。私は後ろに踏み出しかけていた体を強引に前に倒して、やや遅れて飛び上がる。霊夢の斜め下に潜り込むような形で接近するが、相手は心得たように急停止、私に向けて掌底を繰り出した。霊力を込めたその掌底は、ただの掌底よりもはるかに強い衝撃、もはや、壁を叩きつけるかのような力で私に襲いかかった。

43

急停止にぎょっとしたが、なんとか防御は間に合った。しかし、防御に気をとられて、飛行は完全に解除された。自分の体が重力に支配される。次の瞬間、自分の真上と真下に結界が形成された。ありえないほどに矢継ぎ早に繰り出される霊夢の攻撃。受ける?避ける?迷う間にも結界の壁は徐々に迫ってくる。

42

(…く、避けれない!かといって受けたら霊夢の思うツボ…?)

結局最後まで私は決めれなかった。だから、結界の壁に為す術もなく触れたのも、「あえて」という表現は使えないのだろう。それでも私は、触れた瞬間にはある意味アリかと思った。これは遠距離攻撃なのだから。こういうのなら、どれだけ喰らっても大丈夫。そう思った。

しかし、私の考えは甘かった。どこまでも、いつまでも甘かった。結界の壁は触れても消えない。それは、実際にはたった一秒足らずの、それでも私には永劫にも思える時間的拘束を与えた。

41

その拘束時間を利用して、霊夢はゆうゆうと飛び蹴りを成功させる。空中で受身をとって、着地。霊夢も私のあとに続いて地上に立つ。

40

避けれない攻撃を仕掛ける能力、防御も見透かされ、ダメージ覚悟であえて受けても追撃の準備も万端。格が違うと素直に感じる。本当にどうすればいいのか分からない。それでも、諦めない。それだけはしちゃいけない。

39

だって、私は何もしてない。まだ、何もしてない。霊夢が最後の攻撃を始めてから、私は何もしていない。ただ受けるだけで、逃げようとして。目の前の障害へ、立ち向かっていない!

38

4度目となる霊夢の接近。一度目はただ受けた。二度目は受けきれなかった。三度目は近づくしかなかった。今度は違う。自分の意識で明確に。はっきりと。霊夢を迎え撃つ!

37

霊夢の挙動を凝視、視界から消えた瞬間に小さくジャンプ。さっきと同じようにスライディングを繰り出していた霊夢はちょうど私の足元に潜り込む形となる。ここだとばかりに踏みつけるように攻撃を繰り出せば、霊夢はそれを避けようともせず、そのままの勢いで斜め上に跳ねあがった。

36

どういう思考回路があればそんな避けかたになるんだと思っても、態度には出さない。着地と同時に振り返れば、すでに霊夢はそこにいない。

35

どこにいったと思う間もなく、まさしく後ろ上から急襲を受けた。不意をつかれたその衝撃に体が地面に叩きつけられ跳ね上がる。

34

正直、ありえないと思う。妖怪よりも妖怪じみた戦闘能力。けど。

(…もう逃げない、諦めない!)

霊夢に私が勝つところがあるとするなら、それは意志の力と回復力。

中空に浮いた私を追撃するべく霊夢は飛び上がる。それを、きっと睨み返して、お返しの弾幕を放つ。

33

流石にこれには対応出来なかったようで、霊夢が直撃を受けて後ろに飛ばされる。お互いに地面につく前に、身を翻して着地。すぐに向かい合って仕切り直し。

32

そうだ、これで合っている。1分耐えるのに一番確実な方法。ガードだけで耐えきろうとしたら相手の多彩な攻撃に破られてしまう。ガードしかしない相手なら、向こうには手がいくらでもあるんだ。

31

こっちから、手を出す。こっち側がとる選択肢の量を増やす。それによって、相手の読みを難しくする。あわよくば、ダメージを与え、距離を開けて、時間を稼ぐ。それがこのスペルカードの最も正しい撃破方法のはず。

30

相手の行動を読みあい、次の一手を瞬時に判断する。避けるか、受けるか、反撃するか。何のことはない。いつも通りだ。いつも通りの弾幕戦闘じゃないか。

29

（縮こまるな、全力でやりきれ!あの子のためにー!）

28

霊夢の攻撃がさらに厳しくなってくる。投げた大きな札がばらけていくつもの小さな札となり、私の前に弾幕の壁を形成した。

27

遠距離攻撃で、私の動きを縛ろうとしている。そのうえで、直接攻撃を叩き込む機会をうかがっている。

（…この弾幕の後ろから霊夢が接近してくるから突破したら抜け際を狙われる!）

26

ここはおとなしくガード。後ろに押し込まれていると、背後に不穏な気配。とっさに振り向けば、さっきと同じような結界の壁がいつの間にか形成されていた。

（うわ、押し込まれて喰らう!）

さっきのような拘束を受けてはまずい。防御壁をなんとか後ろにも形成して、自身の防御壁に挟まれる形で、やり過ごす。

25

（…霊夢の位置が…）

しかし、この防御の間にまた霊夢は移動。上か?後ろか?左?右?

（…わからなくても!）

「蟲符『リトルバグストーム』!」

相手の位置がわからないなら、全方位の弾幕を放てばいい。手ごたえは後ろから返ってきた。

24

相手の姿を視認しないで、私はバック宙で霊夢の方へ跳ぶ。空中で逆さに見えた霊夢は弾幕をこじ開けてこっちへ接近しようとしていた。距離を確認して、バック宙の勢いそのままに、空中から蹴りを放つ。

23

霊夢はすぐにガード。しかしそのガードでの一瞬の手間で、弾幕の波をさばききれなくなり、押し戻される。

22

（よし、この調子!）

自信がついてきた。これでいい。始めたころとは違う、耐えきれる、という確実な手ごたえ。

21

距離を開けたまま、霊夢は首を振っている。そして、急に札をこちらに投げつけてきた。

20

その札はスピードこそあれ、私の脇を通りすぎていく。背後で霊力が展開されたのを感じ、おそらく先ほどからやられている結界の壁だと推察。と同時に、霊夢は矢継ぎ早に次の札を投げてきた。

19

これも速い。しかし、これは明らかに私に直接当てることを狙っている。避けは厳しい、撃墜しようにもこのパワーはそうそう出来なさそう。ここは素直にガードを選択。

18

少し押し込まれる。さっきと同じように結界にぶつかりそうになるが、そこは二度目。さっきよりも落ち着いて処理できた。しかし

17

（……！？）
さらに私に降り注ぐ弾、弾、弾。大小さまざまな札が私に襲いかかり、ガードが解除できない。後ろの結界はガードしてても拘束力がある。霊夢が即席で作った壁に、まさしく私は押し込まれて―

16

（駄目だ…ガードが…！）
ぱりん、という乾いた音とともに妖力で作り上げた防御壁が崩れさる。破られた衝撃で体が完全に硬直。待ってましたとばかりに霊夢が飛び込んできて、まずは空中からの一撃。

15

（まずいまずいまずい！なんでもいい、霊夢と距離を！）
あと2発。この状態からでは、容易にもらってしまう。けど、体も満足に動かない、スペルも撃てない。防御壁も間に合わない―

14

「あああああああっ！」
刹那。私の脳によぎった一つの可能性。それに賭けて私は咆哮。自分の妖力を瞬間的に鋭く、わずかでもいいから放つ。霊夢もやっていた吹き飛ばすためだけの攻撃。出来るかどうかなど、考えていなかった。ただ、やるしかなかった。
霊夢の左手が体に触れる、それと同時に確かに自分の体から思い通りに妖力が出せたのが感じれた。

13

吹き飛ばされた霊夢は空中で体勢を立て直す。着地するも勢いを殺し切れなかったのか、地面に手をつく。見れば、霊夢の周りの陰陽玉はすでに7つが点灯。あと一発も入れられない。

12

もういくばくもないのだろうけど、あと何秒かなどもうわからない。ひたすら、ひたすら耐える覚悟を据えて、これが最後となるであろう、霊夢の接近を迎え撃つ。

11

霊夢は走りながら、札を投げる。この戦いの中幾度と見た、壁を作る札だ。
（近くにいたら押し込まれるから―）
私はすぐ、前に出て、後ろに出来るであろう壁からなるべく離れようとする。
だが、札は私が思ったよりもはるかに早く空中で止まり、壁を形成した。ちょうど、前に出た私の眼の前に。

10

「わぁ！」
思わず驚きが声に出てしまった。とっさに急ブレーキをかける。と同時に、頭上を飛び越える霊夢の気配。停止した体を無理矢理にねじって振り向くと同時に、背後に着地したであろう霊夢に向けてあらん限りの力を込めて蹴りを放つ。

9

（！当たっ…たっ…！？）
蹴りは確かに「何か」に当たった。「何か」としか言いようがなかった。不確かな手ごたえに本能的に防御を考えたのは正解だったのだろう。突如、周りに大量の札が現れ、数瞬おいて一気に私に殺到した。
（忍者かよ！）
その反則じみた立ち回りに毒づきながら、その場で全てガードしきる。

8

しかし、休む間もなく、霊夢からの突き。やむを得ずガードするが案の定押し込まれる。ここまで読み切ってやっていると思わせてくるあたり、もはや呆れすら通り越す。三度結界に捕まりながら、霊夢のパンチをやりすごす。

7

今度は結界のほうが先に消えてくれた。まるでそれを合図としたかのようにふっと霊夢がしゃがみ込む。とっさに防御を下に意識、霊夢の玉串による足払いをガード。

6

（今度はどうくる、もうあまり時間もないはず―！）
一歩の距離をどう詰めて直接攻撃をしてくるか。それに意識を集中させていた私は、だから、霊夢がしゃがんだ姿勢から札を放ってきても反応出来なかった。

5

（！？）
直撃を受けて吹き飛ばされながら、浮かんだのは疑問。なぜ、ここで吹き飛ばすような攻

撃を選んだのだろう。なぜ、遠距離攻撃などしたのだろう。
答えが出る前に、私は空中で受け身、そのまま着地した。そして、地面に足をつかまれた。
4
(な…結界!?…)
驚きで地面を見れば、私の足をとらえていたのは確かに結界。いつだ、いつ仕掛けた。モーションもなく作れるほど結界はたやすいものじゃないだろう。霊夢が地面に手をついたことなど一度も—
3
(…ある)
私がとっさに吹き飛ばした時、確かに霊夢は『勢いを殺すために』手をついた。否、私はそう思わされたのかもしれない。あの時にすでに張っていたというのか。ついでなのか、意図的なのか知らないけど、どこまで先を見通してるんだ—。
はっと思考と視界が立ち戻った時にはすでに正面に霊夢はいなかった。
2
「〜っ!蟲符『バグスト
どこにいるかわからなかったから、とっさにスペルを展開。しようとした。
でも
一瞬、遅かった。霊夢の跳び蹴りが私の体に突き刺さった。
1
ひときわ大きく跳ね上がる私の体。同時に、霊夢の陰陽玉はついに、全ての光をともした。
(…けど、けど、これを—これを耐えれば!これが終わった後もたっていればまだ!…)
諦めない、決して、あの子のために。その思いは
突如放たれた爆発的な霊力の前に打ち砕かれた。
0
ひとつひとつの札が重い。しかもそれが絶え間なく降り注ぐ。もはや、当たる、ですらない、刺さるとすら表現できるその威力。
(…ごめん…ごめん…!)
私の意識は、攻撃の終わりを知ることはなかった—

リグル・ナイトバグの日常

～森にて、こいしと～

著者：夏樹　真

　とある晴れた昼下がり。
　緑色のショートヘアーを揺らしながら、一人の少女が森の中を歩いていた。規則的に揺れる髪と一緒に、特徴である頭から生えた触角と、背中に羽織っている黒いマントも揺れている。
　ぼーっとした視線で歩いている少女の名前は、リグル・ナイトバグ。あまり背も大きくない少女であるが、これでもれっきとした妖怪である。まだまだ幼さが抜けないのだが、これでも幻想郷の蟲達を束ねる存在である。
　そんなリグルが、こうやってのんびりと歩いている理由。
　それは――――
「ふぁ……ぁー、眠いなぁ……」
　――――そう、眠いのだった。
　蟲達の頂点たるリグルだが、基本的にはそんなに蟲達へと干渉することは少ない。
　リグルが関わらなくても、蟲達は蟲達で勝手気ままに繁栄していくのだ。それは昔からの習慣でもあり、自然の摂理でもあった。
　そんなリグルではあるのだが、もちろん完全放置主義というわけでもなく、必要があればそれなりに蟲達へと干渉していく。何か大きな問題が起きる前に未然に防ぐというのも、リグルの大事な使命であった。
　昨日は夜に暮らす蟲達の間での対立が激しくなっているという話を聞き、両者を諌めるのに時間がかかってしまった。その結果、先ほどのあくびへと繋がってしまうのだった。
　もしもこんな姿を友人の誰かに見られたりしたら、容赦なく飛びつかれたりキックされたりするのがリグルの日常である。今は周囲に誰もいないはずなので問題は無かったが。
　まだまだ重い目蓋を擦りながら、リグルは友人達との待ち合わせの場所へと歩いていく。これでも数十分歩き続けたおかげか、大分意識はしっかりとしてきていた。
　そんな時だった。突如、一部の蟲達がざわめきはじめたのは。
　それは本当にささやかな声で、普段ならば気にも止めないようなわずかな声。
　もしもリグルが少し前みたいにぼーっとあくびでもしていれば、きっとその声に気づくことはなかっただろう。その声自体は、動揺というか戸惑いを含んだような声であった。蟲達の呟きだから大した事はないんだろうけど、一度気になってしまえば、それは無性に気になってしまうものである。
　足を止めて、リグルはその声へと耳を傾ける。
　風の音や草葉の音に紛れ、蟲達の戸惑いの声がリグルの耳へと辿り着く。
　――――あれは、なんだろうと。
　――――あれは、なんなのだろうと。
　――――あれは、何故あんな所にいるんだろうと。
　よく、意味がわからない。リグルは首を傾

げるしかなかった。
　あんまり大した事のない、意味不明な呟きなのかなぁとリグルが頭を切り替えようとしたとき。

　――――あれは、なんで王女の真後ろに立っているというのに気づかれないのだろうか。

　そんな声が、耳に届いた。
　リグルはまだまだ幼いとは言え、妖怪としてそれなりには人生を過ごしてている。それなりの危険にも遭ってきたし、それなりに身を守るための技術だって身につけてきた。近いにいる存在の気配ぐらいは感じ取ることは出来るつもりだ。それが生きていく為の術の一つでもあったから。
　今、彼女の感覚は近くには誰もいないと、そう告げていた。ましてや真後ろに誰かがいるなんて、信じられないと。
　だがとある蟲は告げていた。真後ろに誰かが立っているのに、リグルがまったく気づかないと。
　そんな、ばかな。
「まぁ、後ろ見て確認したらいいだけなんだけどね」
　そう、後ろを向いてみればいいのだ。振り返るだけで、簡単に解決できる疑問なのだ。
　誰かがいるかどうかなんてのは、実際に見てみればいいのだった。そうすれば、自分の感覚と、蟲達の声とどちらが正しいのかはっきりする。
　それを確認するように出した声は、どこまでもいつも通りのお気楽な声で。
「じゃあせーのっで振り向いて確認するかな」
　そう決めて、リグルは後ろを振り向く為に深呼吸をする。
　どうせ後ろには何もいないんだ。早く確認してみんなの所へ行こう。
　リグルは大きな声で掛け声を叫んだ。
「せーのっ!」
　勢いの良い声と共に体を半回転。
　そこに何もいないのを確認しようとして――
――

　――――そこにいるはずがない、帽子を被った少女の姿を目撃した。
「って、うわぁ!?」
　リグルの口から情けない悲鳴が出た。誰もいないはずの場所に誰かが立っていたのだ。仕方がないといえば、仕方がないのかもしれない。リグルの背後にいた少女も、リグルの反応に驚いたのか、ビクッと体を震わせたのが見えた。
　驚いた拍子に足をもつれさせ、そのままリグルは尻餅をついてしまう。お尻にジンとした痛みが走るが、今はそんなことはどうでも良かった。
　リグルの目の前には、確かに一人の少女が立っていた。背はリグルと同じぐらいだろうか、緑色の襟をした黄色のシャツと緑色のスカートを穿いている。特に目を引くのが、雨色のような薄い水色をしたショートな髪の毛と、その頭に被っているリボンつきの帽子、そして服についているんだろうか目を閉じた瞳のような不気味なアクセサリーだ。
　この少女は一体何者なのか。少なくとも、リグルはこの少女のことを知らなかった。
　尻餅をついたリグルを、その少女はじーっと眺めていた。ただ、何をするでもなく、じーっと。
「えっと、その……どちら様でしょう?」
　少しだけ冷静になったリグルは、なんとかそう訪ねることに成功した。
　目の前の人物が何者なのかがはっきりすれば、安全か危険かもわかるという判断だったのだが、そもそも危険な人物であればすぐに襲われていたであろう。そこまで考えが至らない辺りが、リグルの慌て具合を物語っていた。
　その問いに、またしても少女はきょとんとした表情になった。それから本当に楽しそうに笑いながら答えた。
「私の名前は古明地こいし。ばれないようにしていたのに、よく私の存在に気づけたね」
　両手をひざに置いて、前かがみの姿勢になってこいしと名乗った少女はキラキラとした視線をリグルに送ってくる。どうやら、リ

グルがなんでこいしに気づけたのかを知りたいようだった。
　とはいえリグルも自身の力ではなく、蟲たちに教えてもらったのでどう教えたものかと悩む。
　しかし、ここで嘘をつく必要もないだろう。無邪気な視線に対してそんなことをするのも後味が悪い。
「私自身は気づけなかったんだけど、蟲達が教えてくれたのよ。私は蟲の声を聞くことが出来るからね」
　そう説明すると、へーっと感心したようにこいしは目を輝かせた。どうやらリグルの回答は、少女の好奇心を満足させられる答えだったらしい。
「ふーん、なんだか素敵な力なのね。地上ってやっぱり面白そう！」
　前かがみの姿勢から元の姿勢に戻すと、こいしはそのまま周囲を見回す。それから、空を見上げた。
　つられてリグルも視線を上へと向ける。そこに広がっているのは、雲一つない晴天だ。ぽかぽかと暖かな陽気が辺りを照らしている。その日差しの強さに、リグルは目を細めた。
　だから、こいしの発言にちょっとだけ対応が遅れた。
「じゃあね、これから行かないといけないところあるから！」
「え、ちょっと！」
　リグルが視線を空からこいしへと移動させる。
　だが、そこには。
「あれ、もういない……」
　ついさっきまで確かにそこにいたはずのこいしの姿が、なくなっていた。
　リグルが視線を動かしたのは、ほんの僅かな時間である。たったそれだけの時間で、こいしと名乗った少女は忽然とその姿を消してしまったのだった。
　まるで、狐に化かされたかのような感覚。先ほどまで少女と話していたのさえ、自分の思い込みなのではないかと思えるくらい、あっさりと消えてしまっていた。その痕跡は、何も残っていない。
「なんだったんだろ……うーん」
　そんなリグルの呟きも、むなしく風に運ばれて消えていくのだった。

（終）

〈作者コメント〉
　リグルの日常シリーズ、第三弾ですね。ちょうどこいしの日があったのでこいしちゃんにしてみたり。でもきっと、リグルに対してはこれくらいしか興味を持ってくれなさそうな気がするのですよね……悲しい！

『 誘い 』　残虐非道の貴公子

投稿2回目!さすがに二回連続車ネタは厳しいと思いリリカに。
以下宣伝：ニコニコ動画：http://www.nicovideo.jp/user/1611138　スティッカム：残虐非道の貴公子

『 蟲王 』 しゃき・しゃき

お久しぶりでございます。一年間サボってました。多分またすぐサボりまｓ(‘д ‘⊂彡☆))Д´) パーン
この絵を作成するにあたり、虫の標本の写真を撮りに博物館まで行ったのですが、影などの具合でほとんど使えなかったってのは秘密・・・

『 スパッツりぐるん 』 モフパカ

はじめまして。スパッツなりぐるんもいいですよね！

『 もこリグ 』　東

テーマ投稿のネタが思いつかなかったときに、ぼこさんの絵を見てもこリグってのもありだなぁ…とか思ったので描いたけど、やっぱもこリグはないなぁ…

『 無題 』　豆板醤

そろそろリグルは大舞台に立ち上がっていい頃だ…新党立ち上げるとか

『 蛍の光 』　NIGA

初めてデジタル絵です。あんましデジタルっぽくないですが、ご愛嬌ということで。

『 リグル暴走モード 』　カカ男

はじめまして、カカ男といいます。こんなゲテモノのリグルちゃんですがどうかよろしく・・・

夢は時として現実よりも現実界的である
ということは特にこの漫画には関係なかった
虫と
マルキュー
ゴールド
おおう
チルノが
寝ている
Z
Z
Z
どんな夢を
見ている
のかな?
Z
Z
Z
上から読んでも
下から読んでも
レイプ
むにゃ
むにゃ
違え!
一瞬そうか
と思ったけど
やっぱり違え!!
描いた人:羅外

面と向かい合って闘うチルノと慧音。チルノも必死に耐えていたが、慧音の火力の前に弾を止めきれずにいた。

「…くぅぅーっいい加減にしてよ！」

「こっちの台詞だ！」

慧音は慧音で攻めあぐんでいた。チルノは今、能力を守り主体で使っている。そのかなめであるパーフェクトフリーズは、敵味方全ての弾を問答無用で凍らせて、あとはほったらかしという極めていい加減な技である。いい加減である故、弾道や狙いが計算できない。だから、この弾幕は攻撃には向かないが、守備においては、攻め手の神経を削る弾幕となる。油断しているところに思わぬ角度から弾が飛んでくる偶然も当然ありうるのだ。

それに加えて、相手はチルノ。会話をしようにも全く成り立たず、というか、口を開いたことに後悔の念しか覚えない相手がいるのかと慧音はげんなりしていた。

しかし、この状態は急に終わりを告げる。

最初にチルノが神社から放たれる強大な霊力を察知。その圧倒的な力に恐怖すら覚え、神社の方を見据える。慧音もややおくれて気づき、つられて、というよりも反射的に振り向いてしまった。

霊力はすぐに収まったが、そのまま茫然と固まる二人。だから、神社から人影が飛び出してきても、どちらも特に反応することもなく、まして、それが誰なのかということも気にしていなかった。あるいは二人とも、すでにわかっていて、手を出す気もなくなっていたのかもしれない。

それなりに疲れた。思うようにスピードは出ないけど、それでも一秒でも早く、この異変を終わらせる。そんな想いで、霊夢は人里へ一直線に向かう。途中、慧音とチルノを見かけた気もするが、構うこともしなかった。慧音の目的は霊夢と同じだし、チルノの目的はリグルと同じなのだから、任せておけばいい。

ようやく、人里を「射程距離」にとらえて、霊夢は一息。そして残る霊力をふりしぼり、スペルを発動せんとする。

「神霊―っ」

しかしその声は途中で止まる。なぜなら。

闇が、解除されたのだから。

後に残されたのは茫然と中空に浮くルーミアだけ。全く、何のリアクションも示さないで、ただ、人里を見つめている。

「ルーミアっ！？ルーミアーァァ！」

チルノが自分のすぐそばを、叫びながら飛んでいく。その声は、その顔は、明らかに驚き、そして、安堵の表情。

まさか、すでに、終わったというのか？このスピードで？

「…確認をしないと」

うわごとのように霊夢はつぶやき、来た道を戻っていった。

ずっと一緒に

～＋０

著者：壁々

眼が覚めたら、霊夢の顔が真上にあった。
「うわぁぁっ！」
驚きで跳び下がろうとしても、体が言うことを聞かない。まるで、どこも動く気配がしなかった。
「起きたわね」
「…霊夢」
上半身だけ、無理矢理起こして、人里を見やる。
「霊夢…人里は？」
「闇が解除『された』わ。」
「…そう…なんでだろ……わからないけど…多分……」
一人、かすかに聞き取れる程度の声でつぶやくリグル。しかし、この声だけははっきりと、霊夢に聞こえた。

「よかった…」

その一言が、霊夢に確信を持たせた。こいつは、何かをやりとげた。やり遂げてしまったと。
「リグル…答えなさい。あんたはこの異変で何をしたの…？」
まっすぐに見下ろす霊夢に、リグルはまっすぐ見つめ返して、口を開いた。
「…あるひとりの蝶の子が、２年前に妖怪への道を踏み出したんだ。
・・・・・・

その子を妖怪への道へ導いたのは私。それからずっと、私とあの子は一緒に過ごしてきた。春も、夏も、秋も、冬も。ずっと一緒に過ごしてきた。あの子は着々と育って、確実に妖怪へと近づいていた。
私は嬉しかった。楽しかった。そして、それを崩したのも私だった。

神社の近くに湧いた間欠泉。私はそれを見に行った。いつもどおりにあの子と一緒に。そこに着いたときに、何か不吉な気配を感じたけど、その時は気に止めなかった。ひとしきりそこで間欠泉を見て、帰った時に、その子はもう、怨霊にとりつかれていたんだ…

どうしてこんなになるまで放っておいたのか。この子はまだ妖力を持った蟲の領域を出てないのに。なぜ気配を感じた時に帰らなかったのか。

この子はもう、助からない。このままでは、怨霊に憑き殺され、この子もまた怨霊となり、地獄をさ迷うでしょう…。

竹林の医者に連れていった時に言われた言葉は、私の心に深く突き刺さった。私の無知が、私の無力が、この子を死に追いやった。それだけならまだしも、私が与えた妖力で、なまじ死ぬことも出来ずに苦しんでいる。蟲とし

ても、妖怪としても死ぬことが出来ず、ただ遺恨のみを残す存在に成り果てる。絶望が、私を包んだ。

だから、そこに差し込んだ光に、私はすがったんだ。

この子は助からない、けど、楽にしてあげることはできる。
一つの方法は楽な方法。この子を魂も残さず消滅させる毒で、楽にしてあげる。後には何も残らない。この薬の使用条件は一つ、貴方のここ2年の記憶も曖昧にさせてもらうわ。彼女に関する事は何一つ残さないでもらう。楽で、誰も傷つかない。時がすべてを解決する。
もう一つは辛い方法。この子の才能に賭けて、妖怪へ瞬間的に昇華させ、人に取り憑かせる。
それを行うのに必要な薬の使用条件は一つ、貴方にその材料集めを頼むわ。もちろん、すべての責任も貴方に持ってもらう。材料集めの段階で、遅くとも人に取り憑かせる段階で確実に貴方は人間と対立する。貴方が築いてきた人間との関係も怪しくなるだろうし、貴方自身もきっと痛い目を見る。人間も妖怪に取り憑かれるわけだから、決して無視出来ないリスクを伴なう。この企みが成功すれば、妖怪退治をするもの、すなわち霊夢も失敗をすることになる。なにより、この子は材料が集まるまで、決行の時まで命をもたせ、苦しみ続けなくてはいけない。苦しくて、辛くて、異変に関わる人妖すべてが傷つく。それでも、この子は決して忘れられない存在へとなる。記憶に、記録に、貴方とともにずっと一緒にいることとなるでしょう。

私はあの子と出会った時に聞いた。「一緒に来る?」と。
私はあの子を妖怪への道に導くときに言った。「一緒に行こう。」と。
私は去年の秋にあの子と誓った。「一緒にいよう」と。
だから、私はここで願った。「一緒にいたい」と。

・・・・・・

…だからこの『異変』を起こした。あの子を人に取り憑かせる為に、人里を闇に包んで人間を眠らせた。確実に眠らせるために、『妖力に睡眠効果を付随させる薬』を服用したルーミアに手伝ってもらってね。この異変は…私の勝ちだよ、霊夢」
いつの間にかリグルの眼には涙がうかんでいた。それでも、リグルはまっすぐと霊夢を見て、確たる意志を眼に宿して、はっきりとすべてを伝えた。
「………っ!今からでも、取り憑いた妖怪なんて引っぺがして!」
「やめときなさいな。」
「!?」
「…幽香さん。」
いつからいたのか、霊夢の背後には幽香がいた。戦闘意欲のなさの表れか、傘は鳥居に立てかけて置いてある。
「…あんたも噛んでたのか。」
「私はちょこっと手助けしただけよ。あくまで主役はこの子。それより、さっきの発言だけど―あの子は引っぺがすとかそういう次元の妖怪ではない。」
「…どういう事よ。」
殺気にも近い剣幕で詰め寄る霊夢に対して、幽香は噛んで含めるように、優しく話す。
「胡蝶の話は流石に知ってるわよね。人が見る蝶の夢。果たして、夢の蝶が人間の夢を見ているのか、人間が蝶の夢を見たのか。その問の答えは『夢という精神エネルギーに同化した蝶の妖怪に支配された人間の夢』。あの子は当にそれに成長したのよ。」
「……」
「あの妖怪の他の妖怪と完全に違うのは、寄生、というより共生に近い関係にあるということ。取り憑いた人間が死んでしまえばもはや生きる術のないあの子は、深く精神に関わる。いることが当然と感じられるまでにね。そんな状態から祓うのは、その人の精神ごと祓うのと変わらない。」
「~~~っ!」
「本来なら、体と精神を切り離して、人と自

分の体を自在に行き来できる妖怪のはずなんだけど…今回のケースでは憑きっぱなし。人から人へと移り住み、あの子は精神世界でずっと生きる。」
リグルの目からも、霊夢から力が抜けていくのがわかった。霊夢が、異変に対して敗北を認めた。関わったもの全員が傷つく、小さな異変がここに終わった。

「…人里のほう、いかないとね。」
うつむいていた霊夢が誰に言うでもなくつぶやいて、飛び去った後。境内には幽香とリグルが残された。
「おつかれさま、とでも言っておこうかしらね。」
「……ありがとうございます。…幽香さん」
「気にしなくていいわよ。あれが妖怪に敗ける、珍しいところが見れたしね」
「一つ聞いてもいいですか。」
「ん」
「何をしてくれたんですか?」
「精神面のケアと、戦闘の心得を少々教えただけ。」
「そうじゃなくて―ルーミアに渡した睡眠薬では、あんな短時間ですべての人間を眠らせれません。というより、闇に包まれた状態、不安を煽るような状態の中で強制的に眠らせるほどの効力はないはずなんです。」
妖力をまんべんなく広範囲に展開できるという利点からルーミアを選んだが、そこにある欠点、不安から来る眠気への抵抗も覚悟していた。それがあると思っていたからこそ、時間稼ぎがもっとも重要なポイントとしてあったのである。
「ふふ、ちょっとだけ『眠気』を萃めてもらったのよ。」
「萃めて…って…」
「あそこまで関わっておいて、失敗しましたじゃあ、こっちも気分よくないからね。」
「……どうして、ですか。」
「ん?」
「どうして…ここまで手伝ってくれたんですか…。」
「……貴女のような熱意は珍しいのよ。」
「?」
「妖怪は、永きを生きていくうちに2つのタイプに分かれるわ。刹那の今を全力で生きるか、永き未来を憂いて、何をするでもなくなるか。どちらにせよ、永きを生きればたどり着く結論は『未来は今と大差はない』。」
「…」
鬼は今を楽しみ、今の連続で楽しい未来を作る。その思想の前提は、今と未来で条件に大差がないということ。明日にいきなり楽しみとなるものが現れる、という考えはとうになくなっているのだ。だから、今にすがる。
「貴女のように未来に希望を、未来に期待を持つ妖怪は非常に稀。毎年生まれ変わる命をはじめから終わりまで見届ける貴方だからこそ、持ち得たもの。」
遠くを見やりながら、幽香は喋り続ける。その視線はどこを見ているのだろうとリグルは考えた。
あるいは幽香もかつては未来を見ていたのかもしれない。あるいは、幽香ほどの大妖怪なら、はじめから未来など同じだったのかもしれない。幽香が今見ているのは、遠い過去の自分なのか、あるいは捨てた未来なのか。
「だから」
幽香はふいに視線をリグルへと戻した。その顔は、少しだけ寂しそうで。それでも優しい笑顔で。
「貴女は…強くありなさい。貴女がもったその財産を大切に、ね」
こう言って、幽香は飛び去っていった。
「……強く、か…」
リグルはそうつぶやいて、大の字に寝転んだ。夜空には無数の小さな星。その中から、一つの流れ星。何を願うでもなく、それの行方を見やったリグルは、それの消え際に確かに聞いた。

(ありがとう)

と。その声に、一筋の涙を流して、笑顔でリグルは眠りについた。

6月号
梅雨特集
扉絵：
ADDA
『無題』
The brave get the beauty。
小傘が美人を得ました。
ゆうかりん…。

フラッ フラッ

雨はマントが濡れて重くなるし、バグタイプの弾幕は使えないし散々だよ

リグルも地底に住めばいいじゃない薄暗くてジメジメしてて快適だよ

ホタルマントの妖怪少女(前編)

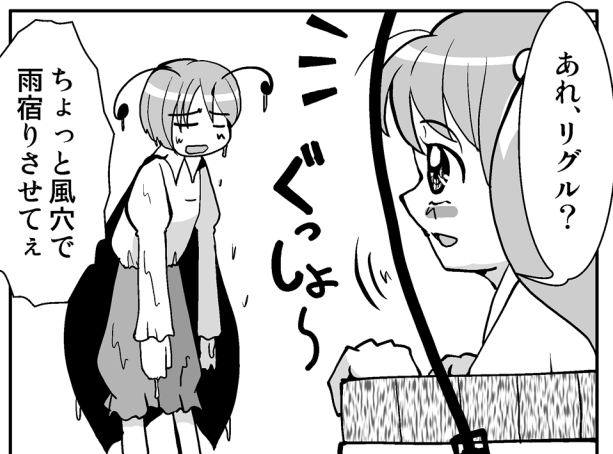
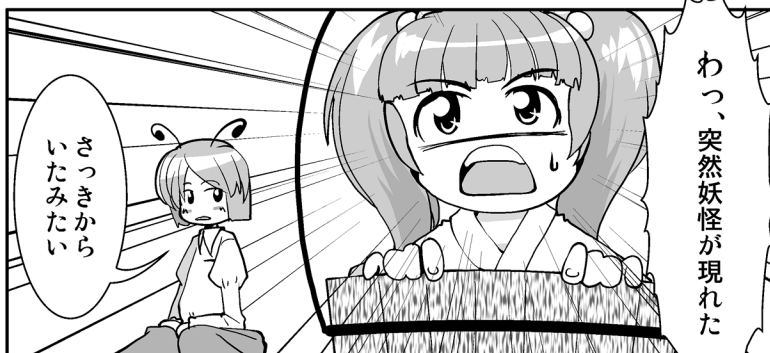
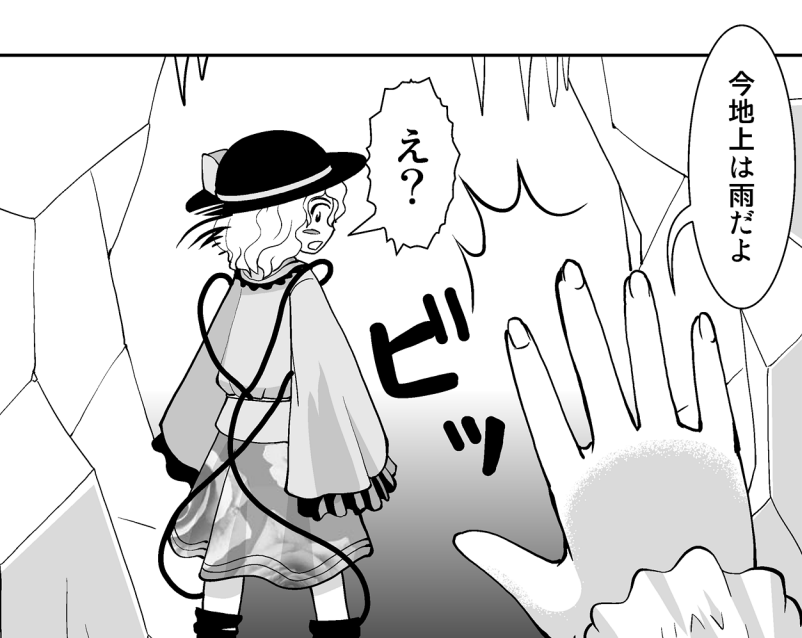
Step

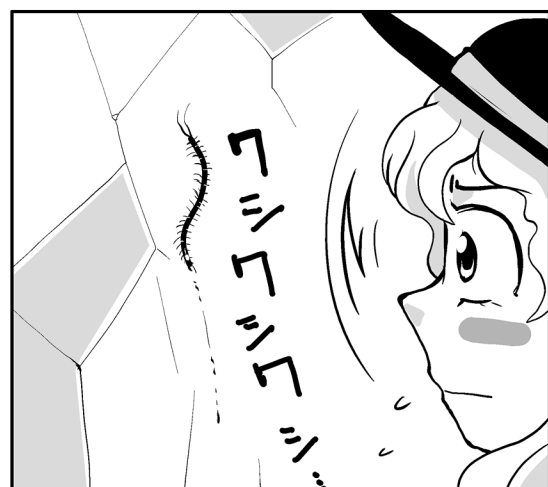
雨の日はカラスに襲われたりしないからいいけど――
ん？

今地上は雨だよ
え？
ビッ

わっ、突然妖怪が現れた
さっきからいたみたい

私に気づいてたの？

こちらも地底の妖怪さん？
……
えっ、私も今気づいた……
ギクッ
え？ うーん、旧地獄に住むさとり妖怪そっくりだから、その近縁かな

ガッ
ガッ
ガッ
さっきまで直接は
見えなかったけど
私の使い魔達はあなた
をずっと捉えてたよ

ワシワシワシワシ…

キ
……蟲ね
へ～
その人に気付かれない
力は意識を持たない生物
には通用しないみたい
仕組みはかわらないけど

良い遊び相手が
見つかったわ
ピシッ

ちょっと!!
何するんだ

とりあえず応援を呼んでくるから、それまで頑張ってね

ゴクッ

つづく

リグると！
しっけ

うーん、蒸し暑いな…
スパッツの中までびしょびしょだよ…

…あ、そーだ
ねぇねぇリグるん
ぱん ぱん

リグるんやっほー！
ちょっ…入ってまーす！

ほらほら見て見て！
おとな！おとな！
もさぁぁ
ど、どーしてそれがおとなのさ！

ってわーーッッ！

え、だってレティがこんな
よくわからないけどむしのしらせ的にその話題はよくない

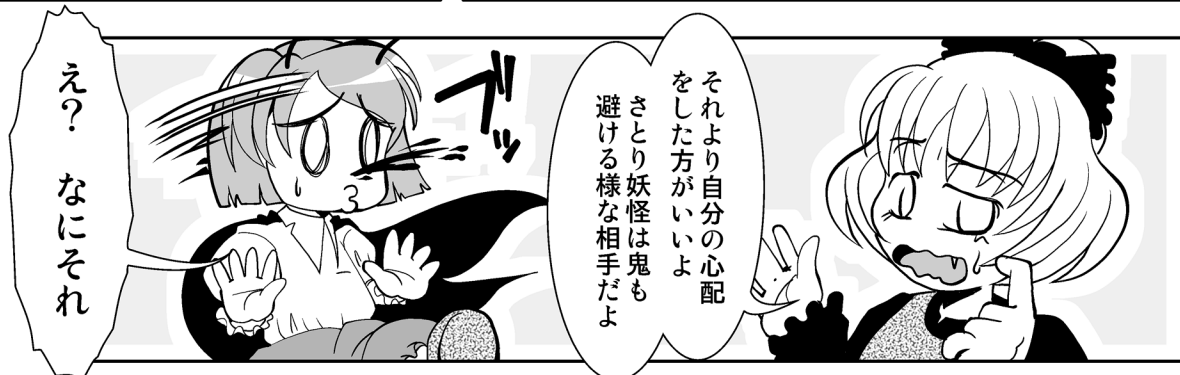
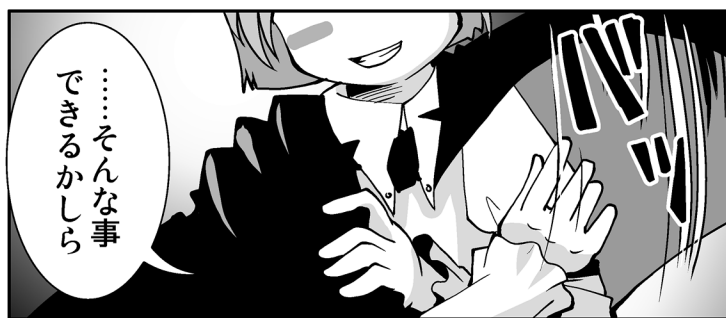
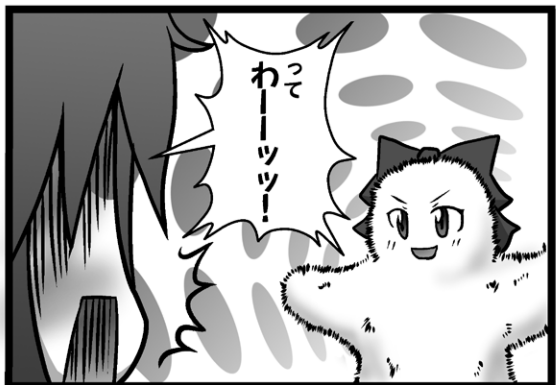
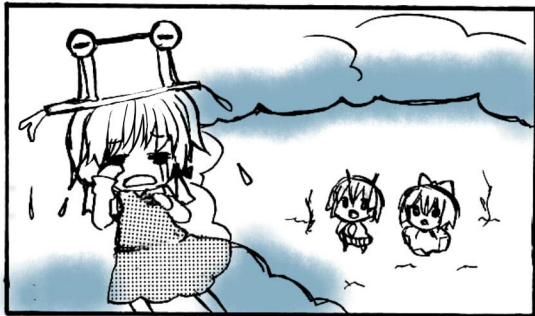
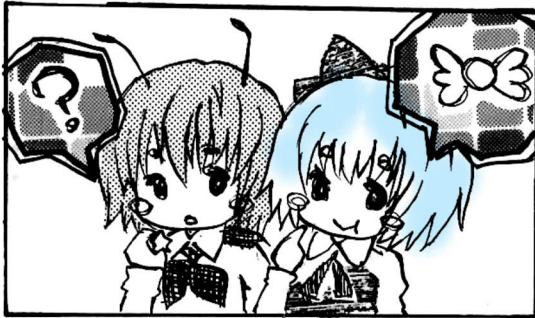
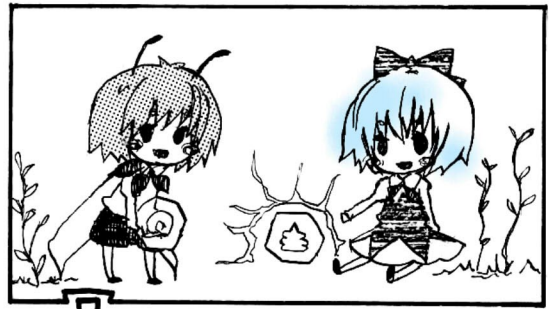
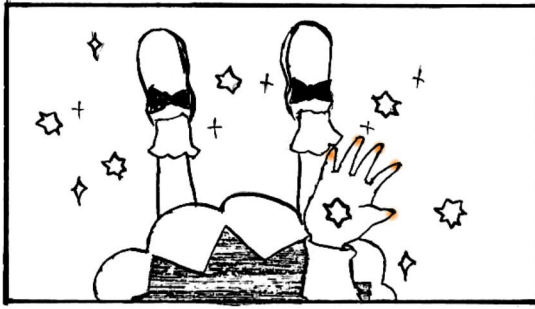
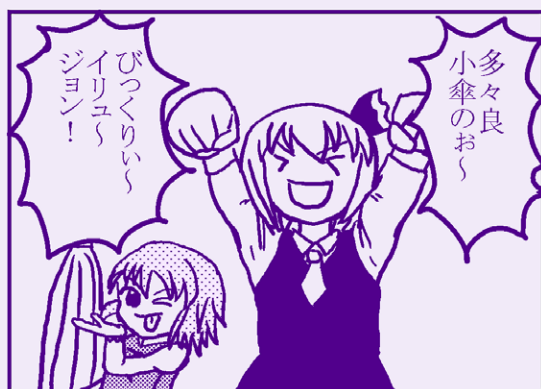
大成功！
まわりの湿気が凍ってこびりついたのか…
ぱっぱっ
もふぁ

ひどぅん

Wriggle & Rain drops!

Kakuemon

Syu-sui

(↑うんこたれ。)

コン
ざあ゛あ゛あ゛あ゛あ゛。
コーン
コーン
← 冷気で凍る。
いだだでででで
ユーン
くるし…
ガビョーン
ポリポリ
?
wriggle & Raindrops
神さまの涙は☆
☆甘かったよ。
END

preludenanoは
『ルーミアと多々良 小傘が間欠泉で
お笑いコンビを組む物語』を書いたら良いよ。

preludenano

だめだよ！
本気でお笑い
目指してるんじゃないの？

人のネタで
笑いをとるなんて
邪道だよ…

自分のネタで
ぶつかっていかないで
どうすんの！

ごめん
ゲップ出そう
大丈夫？
お願いだから
話聞いて！

偉そうなこと
言ってるけど
リグルって
お笑い詳しいの？
よくぞ
聞いてくれた

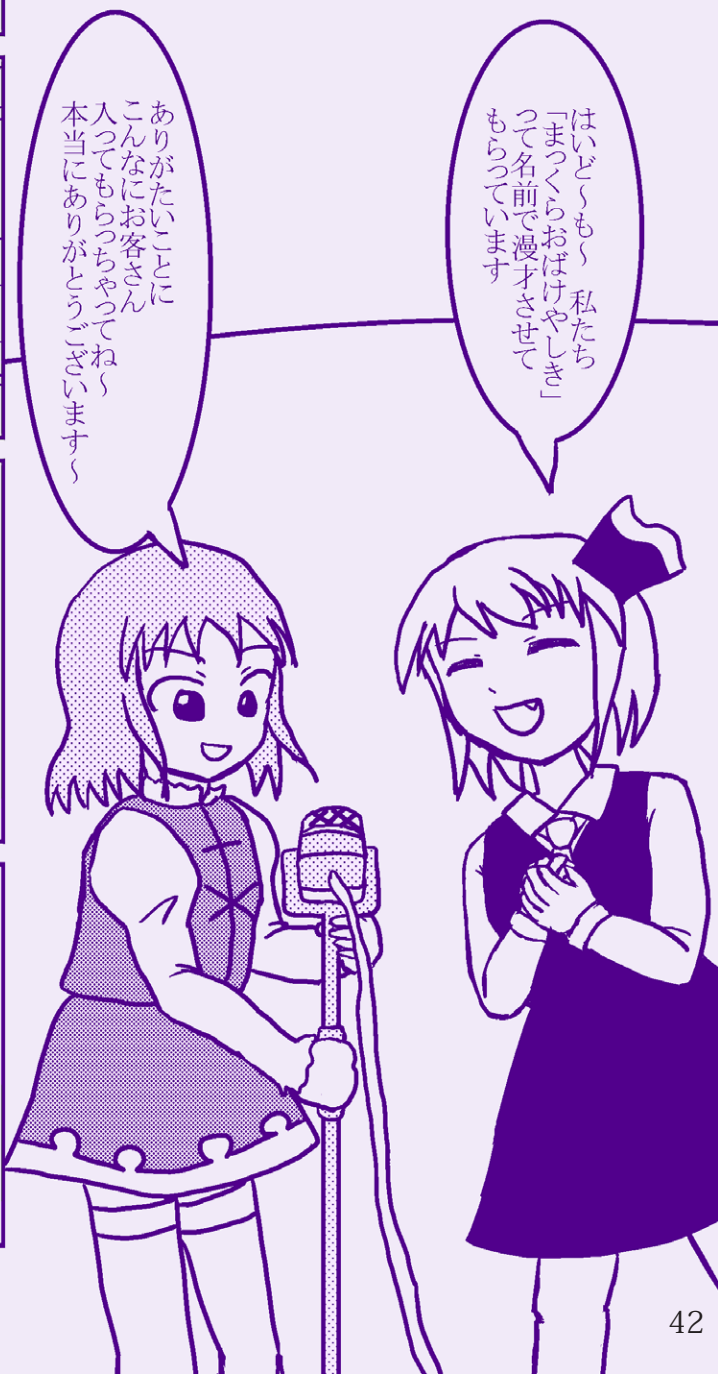
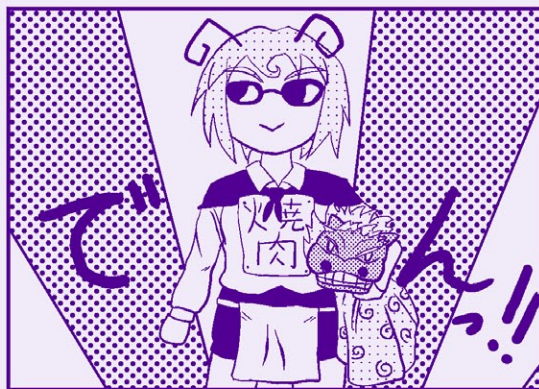
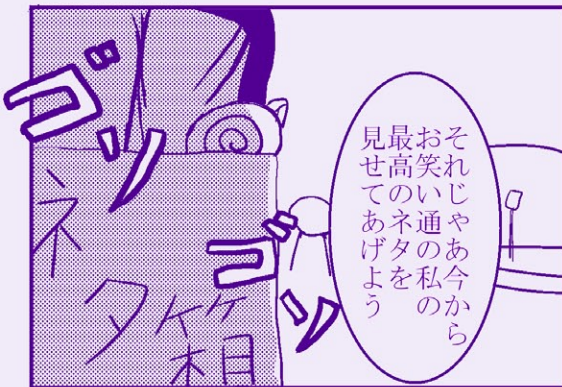
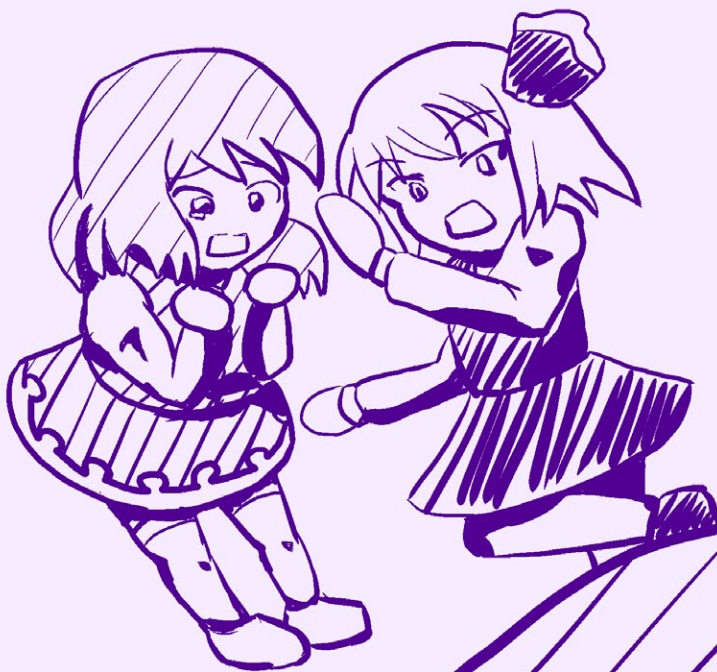
それじゃあ今から
お笑い通の私の
最高のネタを
見せてあげよう
ゴゴ
ネタ箱

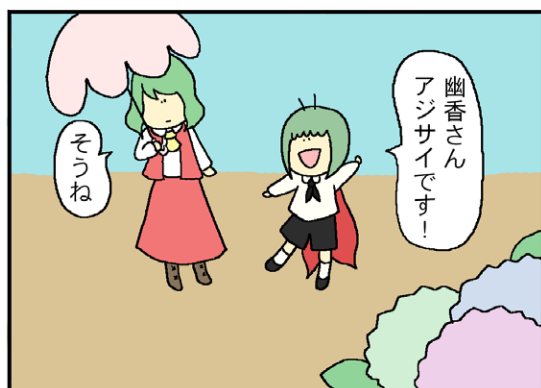
焼肉
でん!!

人のネタを
何のためらいも無く
パクるシリ～ズ

〜おまけ〜

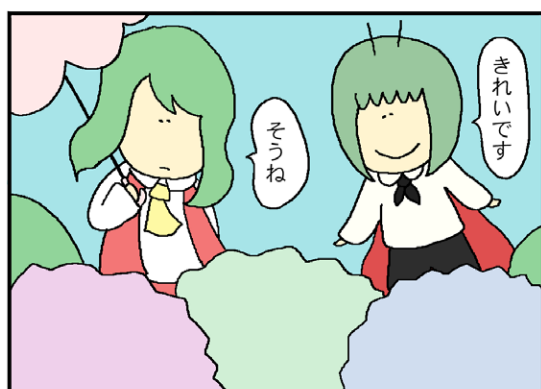
そっちがゲップするんかいっ！
びっくりしたぁ〜…

あ〜ん
私の驚かすの
取られた〜…

fin.

今月のほたりぐるは大雨につきお休み致します。　怒羅悪

リグル
と
もこたん
と
ゆうかりん

梅雨編

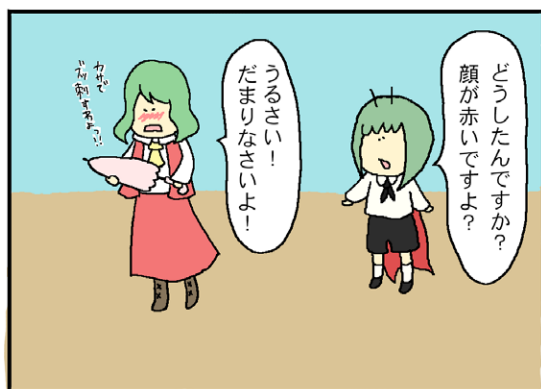
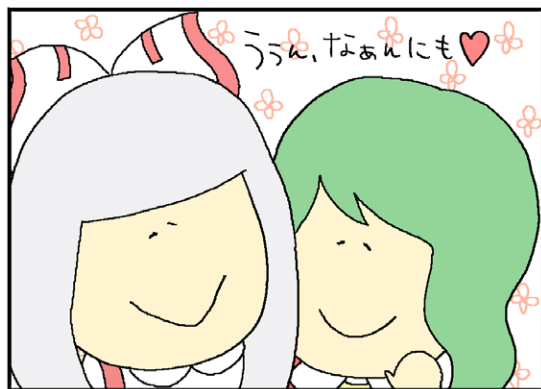
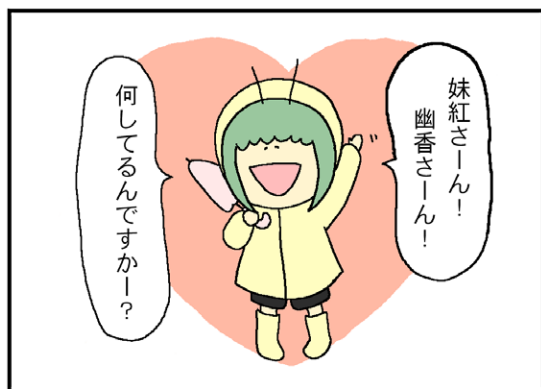
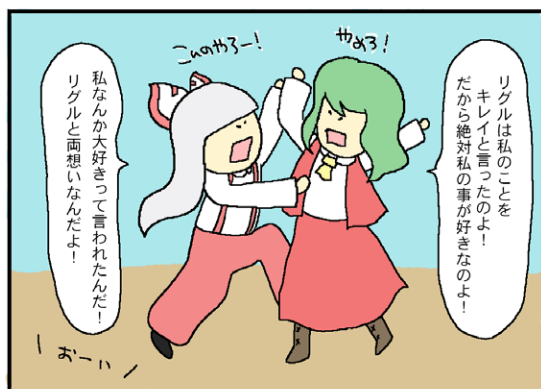
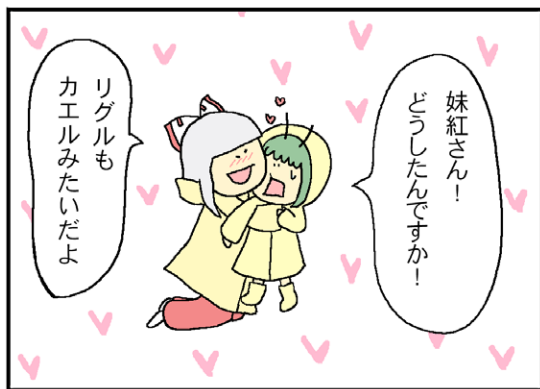
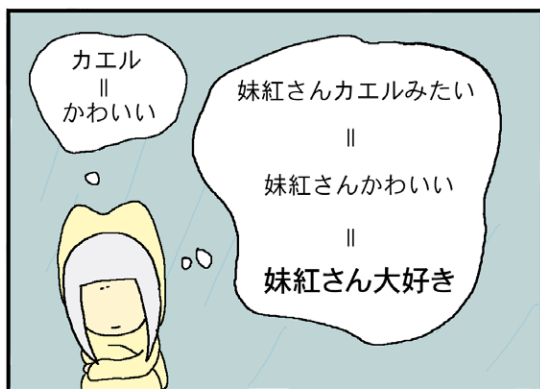
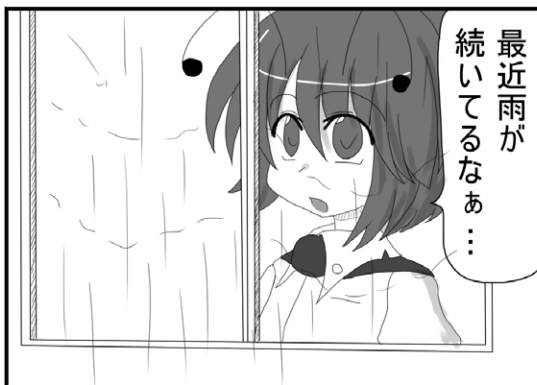
話は最後まで聞きましょう

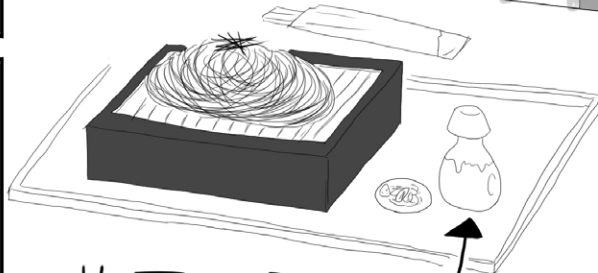
←注 アジサイ

←注 アジサイ

描いた人：ぼこ

カエルみたいですね

喧嘩を止める程度の能力

給食のパンとかがよくギセイに。

楽屋ウラ的何か。

的何か。

梅雨と聞くと
どうしてもこれが
思い浮かびます。

描いたナマモノ
草加 あおい
(カビ生)

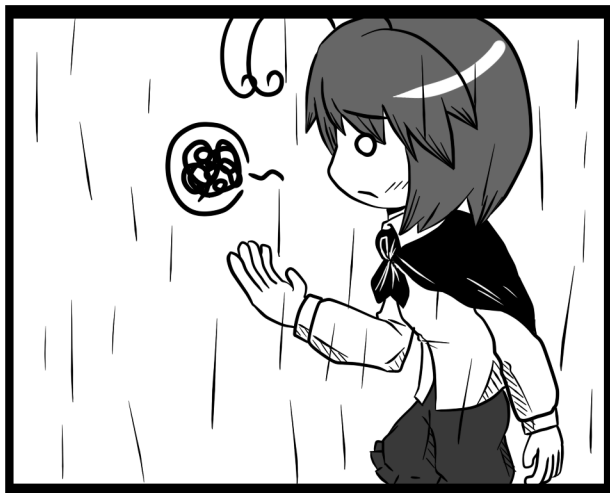
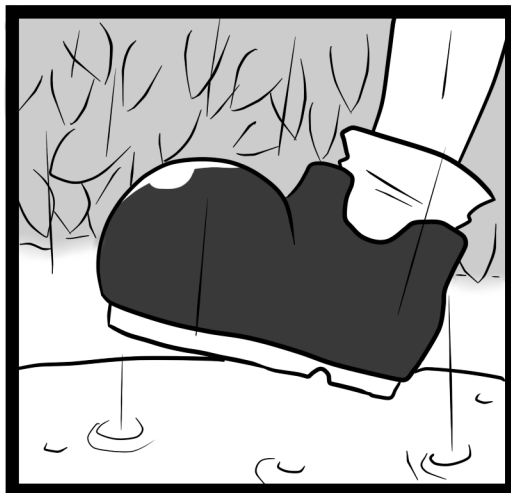
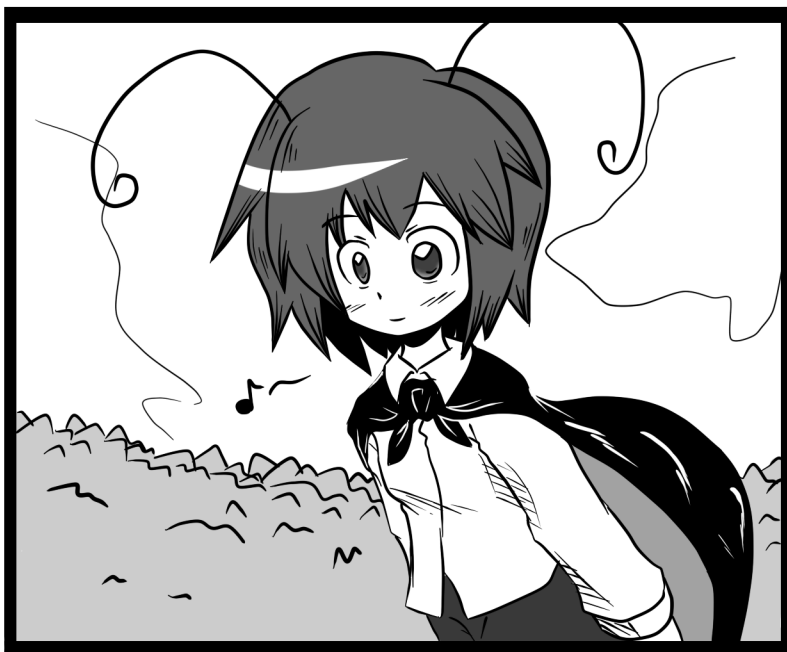
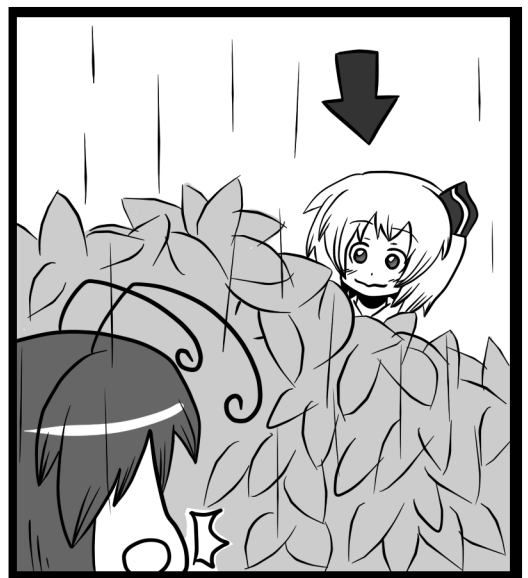
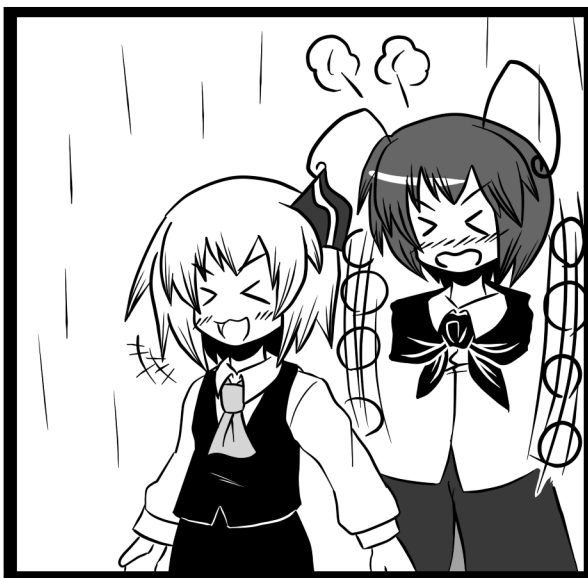
わからなかったら人に聞く!!

英吉利牛と一緒♪

ごめんなさい…

雨々キッカ

オワリ

リグチルの　梅雨漫画

おわり。あ、くらげんです。

『 雨宿り 』　悠木玲二

梅雨と言ったら「雨」だろうと常識（？）に縛らている今日この頃です。

『 POP☆RAIN 』　イリイチ

長靴は好き。傘も大好き。これで歩けば雨の日もまた楽し。

『 あめってんなあ 』　異国の民

まあ一年ぶりに投稿してみたくなったわけだ。毎月見てたけどなあ^ｓ^
足が消えてるのはたぶん隠れてるんだよ。葉っぱが乾きすぎなのは水がよく見えないだけだな^ｔ^

『 晴雨兼用 』　貴キ

「もっとちゃんと傘に入らないと、その肩の子が濡れてしまうわよ？」
「は、はい…！」

『 暫時の水殿 』　蛍光流動

床下浸水ともいう。

『 新種発見！？ 』　やにたま

梅雨の虫（？）といえばカタツムリ、という安直な発想でイラストを描いたらこんな結果に（w
とりあえず野外でこんな虫発見したら即座にお持ち帰りして大事に育てます！（w

『 かたつむリグル 』　残虐非道の貴公子

鳥は種類によってはカタツムリも食べるそうです。雨宿りにカタツムリの殻を借りたリグルの背後に迫る黒い陰・・・(黒くないし・・・)

傘が欲しい

著者：如月翔

『アメダアメダ』
『ヌレルヌレル』
『ネテルネテル』
『オキテオキテ』
　自分達が集めた情報を伝えようと、主の元に集まった蟲達。
　しかしそんな思いも虚しく、静かな寝息を立てながら主は寝ている。
　主の名前はリグル・ナイトバグ。
　暖かく強い風も吹く春が過ぎ、初夏を迎える準備が整った自然の中に彼等は居た。
　蟲の数は少しずつ増え、あっという間に辺り一面が蟲に覆われた。
『カエロウカエロウ』
『オコサナキャオコサナキャ』
『ヌレルヌレル』
『オキテオキテ』
　集まった蟲達は、主を起こすか帰るかで半々に別れ話しあう。
　しかし、話し合うと言ってもカタコトの単語が飛び交うだけで一向に決まる気配はなく時間だけが過ぎていく。
　雲は次第に濃くなり、周囲を暗く染める。
　雨は次第に強くなり、周囲から音を奪う。
　それでも主が起きる様子はない、濡れる事なく静かに眠る。
　濡れない理由は彼等の居る木にあった、幾重にも重ねられた枝と葉が下にいる者をまるで守っているかのように包み込んでいたからだ。
　しかし、蟲達はそれを知ってか知らずか次第に数を減らし各々の巣に戻っていく。
　主が濡れないことに安堵しての行動か？自分達が濡れるのを嫌がってした行動か？
　残った少しの蟲と寝ている彼女にそれを知る術はなかった。
『ダレカクルダレカクル』
　不意に一匹の蟲が誰かの気配を読み取った。
　蟲達は少しずつ近づく気配に意識を傾けるが詳しくは判らない。
『ダレダロウダレダロウ』
『ワカラナイワカラナイ』
『チカクチカク』
　蟲が向いている方角から一人の少女が木々を通り抜けそっと現れる。
　その少女は紫色の傘を持ち、右が青で左が赤という珍しい目の色を持っていた。
　少女はリグルを起こさないように浮いたまま近づく。
　近づき……、人間ではなく自分と同じ妖怪ということに今更気付いて項垂れ隣にゆっくりと腰掛ける。
「折角ばれないように来たのになー」
　少女は独り言を言うように小さな声で呟いた。
「ん……」
「おはよう」
「おは……よう？」
　目が覚めた私の横に知らない人が座っていた。
　周囲にたくさん居たような気がする皆の姿は見当たらず、少し驚いたが何とかこらえた。
『皆何処に行ったの？』
『カエッタカエッタ』
『イナイイナイ』
『そう……君達も帰ってもいいよ？』
『オナカスイタオナカスイタ』
『カエロウカエロウ』
『ゴハンゴハン』
「ずっと寝ていたんだよ？」

「……何時から居たの？」
「雨が振り始めた頃だから結構前からかなぁ」
「雨は濡れるからいやだなあ」
「ところであなたの名前は？　私は多々良小傘」
「私はリグル・ナイトバグだよ」
皆と別れの会話をしつつ小傘と話す。
何時からか分からないが降り続けているらしい雨を見る。
蛍だった時とは違い、今の姿になってからは着るようになったが。
布が濡れて肌にひっつくのはあまりいい気分とは言えない……正直に言うと気持ち悪い。
「傘があれば、濡れずに済むけどね」
「そうだけど、私は持ってないから」
傘か……、そう言われてみると降るのが分かっているなら用意しておいた方がいいかもしれない。
また香霖堂にでも行こうかな？
「うらめしやー」
「……お腹はすいてないかな？」
「蕎麦屋もないけどね」
唐突に声を出した彼女に答える。
急だった割に驚かすつもりもなく、何となく言ったのかもしれない。
「雨が降っているから誰か出歩くと思ったのになぁ」
「雨が降っているから誰も来ないいんじゃない？」
「最近は驚いてくれる人間が居なくてひもじいし」
「驚かせていたらその内、退治されるんじゃない？」
「驚いてないのに巫女に退治された、理不尽よ」
「それは理不尽ね」
異変が起きている時の巫女達に出会ってしまったら戦うしかない。
多分一度でも戦ったら会わないように、見えたら直ぐに逃げる。
一部例外や運悪く出会ってしまった物もいるかもしれないけど。
そんな中蛍が一匹戻ってくる。
『どうしたの？』
『ヤクソクヤクソク』
『……』
「あぁ！？　屋台に行かなきゃ」
「うわぁっ！？　びっくりした……」
急に声を上げて立ち上がったため、小傘が驚く。
「あ、ごめんごめん」
「うぅ……びっくりさせる側なのに」
謝りつつも内心焦る、すっかり忘れていたが今日は屋台で皆と呑む約束をしていた。
「屋台ってリグルがやっているの？」
「いいや、友達がやっているんだ」
「屋台って……焼き鳥とか？」
「焼くけどちょっと違うかな……」
ミスティアが聞いたら怒りそうだ。
屋台と言えば焼き鳥が思い浮かぶのは何となく分かる気がするけど。
「小傘も来る？」
「行こうかなぁー」
立ちあがり傘を開いて私に手渡す。
思わず受け取ってしまったが固まった私を見て彼女は口を開く。
「私は傘だから気にしなくていいよ、誰かが濡れないように使ってもらうのがするのが私の本当の役割だから」
見ているこっちが悲しくなるような笑顔で彼女は語る。
何があったのか知らないけど、無理をして笑っているようにしか思えなかった。
それがからかさお化け、多々良小傘との出会いだった。

「いらっしゃい……」
梅雨になるということもあるけど、小傘に会ってから傘が欲しくなり香霖堂を訪れた。カランと心地いい音を鳴らし店内に入ると妖怪が二人。
一人は緑の髪で、白いシャツに赤いチェックの上着とスカートを着た、普段ならこんな場所で見かけることなどない風見幽香。
もう一人は金の髪に、赤いリボンの付いた白い帽子を被り。白いよくわからない服に紫

のこれまたよくわからない物を重ねた賢者と言われる八雲紫。
　共通点と言えば……強くて、傘を持っていて、何を考えているのか分からない人。
「何をお求めかな？」
　店主は心底居心地の悪そうに問い掛けてくる。
　私だったら正直耐えられずに逃げ出してしまうけど、自分の店だから逃げられないのだろう。
「傘を作ってほしいのだけど」
「傘を売ってほしいじゃなくて？」
「そう、傘を作ってほしいの、出来るって聞いたけど」
「オーダーメイドということか、誰から聞いたかは聞かないがその通り出来ないことも無い、がそれなりの時間とお金を頂くけどいいかい？」
「いいけどどれくらいで完成するの？」
　折角傘を用意するなら自分のだけが欲しいし、ここの店主はそれが出来ると魔法使いから聞いた。
　そして作って貰うのだから、やはり使ってみたい。
　梅雨じゃなくても雨は降るが、梅雨が終わる前に完成させてほしい。
　季節感と言うのは大事だと思う、年中半ズボンな訳ないじゃない。
「早ければ一週間以内、遅いと……何時になっても完成しない」
「どうして？」
「僕の責任ではないよ、材料はあるし技術もある。それに必要な物も早ければ今日中に集められる」
「？」
「オーダーメイドという物は世界で依頼人の為だけに作られるものだ、大多数に合うよう作られる大量生産品とは違う。依頼人の要望を受けその要望を依頼人と細部まで話し合いをして作る」
　今回の場合ここで言う依頼人は君の事だ。と付け足す。
　材料もあって技術もあるけど無い物？
「形ってこと？」
「そう、君が望む配色に模様それに形……和風もしくは洋風というだけでもデザインの幅は広がる」
　そう言って紙と筆を取り出し渡される。
　デザイン……考えても無かった事に筆を持っても動かすことが出来ない。
「丁度傘なら和洋両方あるしゆっくり考えてみるといい、壊れても直せるし大事に使えば修理しなくても長い時間使える物だしね」
　言いたいことを言い満足したのか本を読もうとして開く、が開いた瞬間本は机から消えた。
　隙間で吸い込み、奪い取った本を抱えた八雲紫と暇そうにしていた風見幽香が口を開く。
「接客の途中でお客さんを放置したら駄目じゃない」
「そんな態度じゃ立派な道具屋になれないわね、花屋の娘を見習ったら？」
「君達はお客なのかい？」
「「お客じゃなくて冷やかしですわ」」
「なら文句を言われる筋合いはないのだが……」
「文句じゃなくてアドバイスよ」
「そうそう、折角この子がオーダーメイドで傘を作ってほしいって来たのに」
　そう言い風見幽香が傘を描くのに苦戦している私から紙と筆をひったくる。
　返してもらおうとすると変わりに質問が返って来た。
「それで、あなたはどんな傘を考えるのかしら？」
「一言で傘と言ってもデザインを除けば雨を防ぐ雨傘、太陽光を防ぐ日傘、晴れでも雨でも使える晴雨兼用傘とあるわ」
「私の傘みたいに晴雨兼用に弾幕を防ぐ機能を付加出来るしねこの店主は」
「複数の機能が無駄だと思うのならどれか一つにすればいいし」
「無駄こそが美しさ洗練された道具なんて美しくないわ！」
「あなた中々良い事言うわね」
「道具に無駄な機能なんて存在しない、作り手からしたら必要だからこそ取り組むんだ」
「機能を付けるよりもデザインを重視したらどうかしら、この子は傘が欲しいと言ったの

だから」
「確かに日傘が欲しいとは言ってないわね」
「えーどうせなら付けちゃおうよ」
いつの間にか店内に入り込んだ小傘も会話に乱入する……。
私は雨に濡れないならいいんだけどなあ。
このまま放っておいたら何処まで続くのかと思っていたが。
そこに我に帰った店主が呆れたような顔をして割り込む。
「……オーダーメイドだから僕達が話し合っても仕方ないな……、それで君はどんな物がいいんだ？」
「雨を防いでくれる普通の傘がいいです」
「形は和洋どちらにしようか？」
「形は洋傘で、色は緑でお願いします」
緑色、それは私の髪と同じ色で一番好きな色。
だから私は緑色をした弾幕を好んで使う。
それに緑は木や森といった自然を一番簡単に表現できる色だとも思う。
何でそう思ったのかは上手く言葉に出来ないけど、何となくそんな気がする。
「判った、じゃあ早速作業に取り掛からせてもらおう。また……二～三日したら来てくれ」
そう言って店主は店の奥に消えた。
傘を持った三人は自分達の傘に対するこだわりを語り合っていた。

「いらっしゃい」
頼んでから三日が過ぎ、再び香霖堂を訪れた。
今回は私以外に誰も居なくて、店主は本を読んでいた。
店主は来たのが私というのを確認すると立ち上がり、布を数枚持ってくる。
「僕が用意出来る緑色はこれくらいだけど、お気に召す物はあるかい？」
濃いと薄い、明るいと暗い、それらを組み合わせた緑が眼前に広がる。
全部と答えてもいいけどさすがにそれはどうかと思うし……。
「これがいいです」
少しだけ悩んだが私が選んだのは濃過ぎず薄過ぎることもない明るい緑。
理由は私の髪が濃くて、弾幕が明るいからその二つを混ぜたようなイメージで選んでみた。
試したこともないし、実際どんな色になるのか分からないけど。
「分かった、今から完成させるから待っていてくれ」
「もう出来るの？」
「早ければ一週間以内と言っただろう？他の部分も出来ているからすぐさ」
「早いんだね、もう少しかかるかと思っていたよ」

「これくらい朝飯前だよ」
手際よく布を骨？に貼付け傘を組み立てていく。
しかし……傘のことはよく知らないけど何となく骨が多い気がする。
「これ何か多くない？」
「骨の数かい？良いところに気づいてくれた。これはちょっと趣向を凝らしてみたんだ」
「趣向って丈夫になるの？」
「そうする場合もある、けど元々これは丈夫だから違う。十六という数字は菊の紋章の花弁数と同じでね、菊の紋章は桜に対して秋を象徴する花で鎌倉時代……今から七、八百年ほど前の時代に当時の上皇と呼ばれるお偉いさんが皇室の家紋として使用したと言われているんだ」
「皇室って何？」
「皇室というのは天皇や皇族の総称のことで、詳しいことは省略させて貰うが簡単に言うと偉い人達の集まりで、構成するのに女王が含まれる。人間の決めたこととはいえ我ながら中々良い案を採用したと自負しているよ」
女王……私には何か似合わないなぁ。
悪い気はしないけどね？
「さぁ、完成だ。それではお代を頂こうか」

少女が一人傘をさし雨の中歩く。
　本格的に梅雨が訪れた幻想郷は、結界を隔てて存在する外の世界と変化がないようにも思える。
　雨の中を好んで空を飛ぶ者は人妖問わずほとんどいない、かといって地上を歩く者が増える訳でもない。
　何時も呑気な妖精も今は姿を見せず、何処かで雨が止むのを待っているのかもしれない。
　人が居ないのだから弾幕ごっこも行われず、ただただ静かに雨が支配する世界。
　この世界から雨以外の全てが無くなってしまったように錯覚してしまいそうだ。
　しかし耳に意識を集めると雨音に混じりつつも微かな声が聞こえる。
『アメダヨアメダヨ』
『ヌレルヌレル』
『雨だね、こっちにおいで』
『ナニソレナニソレ』
『ヌレナイヌレナイ』
『これは傘って言うんだよ』
『カサスゴイカサスゴイ』
『オオキイオオキイ』
　蟲達は初めて見る傘に興奮する。
　木の中や地中、茂みや石の下等で雨を過ごす彼等は傘を見る機会がない。
　仮に見たことがあったとしても、彼等の疑問に答えてくれる人間は居ない。
　彼等の声を聞き意思の疎通が出来るのは同じ蟲か彼女しか居ないのだ。
『ダレカクルダレカクル』
『何処から?』
『アッチアッチ』
『誰か分かる?』
『カサカサ』
『ムラサキムラサキ』
『マエミタマエミタ』
　傘、紫、前に見たことがある。
　あの子だ、と彼女は確信した。

　雨なら傘を持てばいいと言ったあの子。
　悲しい思いを秘めたような笑顔で自分の本来の役割を語ったあの子。
「こんにちは、いい雨だね」
「びっくりした……どうして分かったの?」
「皆が教えてくれたから」
「へぇー便利だなぁ」
「傘も便利だよ」
「……大事に使ってあげてね?捨てられるのも忘れられるのも拾われないのもとても悲しいから……」
「大事に使うよ、その為に私だけの傘を作って貰ったんだから」
　オーダーメイドで彼女の為だけに作られた傘、この傘が実は無縁塚から拾ってきた傘を寄せ集めて作ったことを彼女は知らない。
　一度捨てられ、一度忘れられた傘、しかし一度だけこの幻想の地で拾われ、新品同様に作り変えられた彼女だけの傘。

　――その事を彼女は知らない、けれどもその傘を手放すことはないだろう。
　彼女も失う痛みを知っているから……。

（終）

〈作者コメント〉
　先月で地位向上が終わり、今月から新しいネタをやろうと思いましたが間に合わず、苦し紛れに特集に初挑戦。梅雨ということもあり小傘と絡める話は被る、ならもう一工夫だとやってみました。霖之助はミニ八卦炉に空気清浄機を溶かし込んだ……、なら傘に傘を溶かし込める筈だと思うのです、私のバイト先に置かれている大量の忘れ傘に思いを抱きつつも一人で何十本も使うことは出来ないので少しでも救えたらと……。

イマを生きるムシ

著者：悠奈

　幻想郷に梅雨が訪れていた。彼女が生まれた時もこんな時期だった。あの人は今何をしているのだろう……？

「何を物思いにふけているのかしら？」

　その声で思考の世界から現実に引き戻された。声のした玄関の方を見ると、緑色の髪をした女性が雨で濡れた傘を畳んでいた。

「あ、幽香さん。久しぶりですね」

　それを見て部屋の棚からタオルを取り出してその女性、風見幽香に差し出した。

「ありがとう。貴女が前にくれた蜜が無くなってきたからまた貰おうかと思ってね」

　受け取ったタオルで身体についた水滴を拭く。その度に揺れる綺麗な髪から花畑に咲く花の良い香りがする。

「あ、蜜ですね。ちょうど一昨日に幽香さんの花畑に放してる蜜蜂達の蜜を収穫したばっかりで……ちょっと待って下さいね」

　部屋の戸棚を開ける。様々なラベルの貼られた瓶が入っている。それぞれに木の実や樹液といった物が入っている。私はその中から『蜂蜜：幽香さん』とラベルに書かれた瓶を取り出し、幽香さんに手渡す。

「はい、コレです。幽香さんが花の手入れ上手だから良い味になってますよ」

　私がそう言うと幽香さんは瓶の蓋を開け、人差し指を蜜の中に入れた。そして指についた蜜をそのまま口へと運び、ちゅうっと音を立てて吸う。

「……相変わらず良い出来ね。あの蜂達に感謝だわ」

　そう言って幽香さんは笑った。

「蜂の皆に伝えておきます。あ、幽香さんお茶飲んで行きますか？」

「ありがとう。頂くわ。」

　そう言うと幽香さんは部屋の中央にある机の前にある椅子に腰掛けた。せっせとお茶とお茶菓子の準備をした。

「ところで、私が来た時に貴女は何を考えていたのかしら？」

　幽香さんは机の上で頬杖を突いて聞いてきた。

「え？……ああ、あの子のことを」

　お茶を入れながら呟いた。

「この時期になると、急に思い出しちゃうんです……」

　カップにお茶を注いで机に運ぶ。幽香さんは変わらない表情で見つめていた。

「元気かなぁ、とか色々思っちゃう」

「あの子は元気に馬鹿してるわよ」

　幽香さんが少し笑いながら答える。

「もうだいぶ前の話よね……」

「ええ……」

　二人は昔話を始めた。

◇

冷たい雨は体温を奪う。弱った身体なら死

に繋がる。そんな危険な状態に一人の女性はあった。

「…………」

　黙ってただ歩く女性、雨に濡れた髪は乱れ、身に着けている和服はあちこち破れていた。

「……っ！」

　傷ついた腕が痛む。激痛に顔をしかめつつ歩く。女性は時々後方を確認する。その顔は何かに怯えているようだった。

　ひたすら歩き続けた結果、彼女は山間の花畑に辿り着いた。彼女は周りを見渡す。彼女以外の人の姿は無いようだ。

「…………」

　その様子に安心したのか、彼女の身体から力が抜け、花畑の中に倒れこんだ。雨で湿った土が彼女の顔、服につく。しかし、彼女はそれを気にしない。むしろ気にする余裕も無いほど疲労していた。そのまま彼女の意識は薄れていった……。

◇

　女性は朝の陽射しを受けて眼が覚めた。女性の視界には見慣れない天井があった。

　天井？どうして……？たしか私は花畑の中で寝ていたはずなのに……？

　身体を半分起こして周りを見る。木造の整理された部屋が見える。ここは誰かの家らしく、自分はその誰かの手により運びこまれたことがわかった。彼女がしばらく考えていると、部屋のドアが開くのが見えた。そこから赤と白の洋服を着た緑髪の女性が現れた。

「あら、目が覚めたのね」

　部屋に入ってきた女性はコップと水差しを手に持って女性のいるベットに近付いた。

「…………」

「そんな怖い眼しないでほしいわね。」

　女性はベットに腰かけ、コップに水を注ぎ、彼女に差し出す。

「……」

　彼女は無言でそれを受け取り一気に飲み干す。

「……どうして助けたの？」

　コップを返しながら訪ねる。女性はコップに水を注ぎながら答える。

「私の花畑に異物があったのを察知したから排除しようとしたらまだ息があったから気が向いて看護した。という話よ」

「……ありがとう」

「感謝されることも無いわよ。だって、貴女蟲なんでしょ？」

　その言葉を聞いて彼女の顔が強張る。

「大丈夫よ。何も取って喰うわけじゃないわ」

　手をヒラヒラと振りながら答える。

「蟲は花にとって害ともなり利ともなるからね。大切にしたいの。貴女に触角が無ければそのまま土の肥料にしていたわ」

　そう言って女性はコップを差し出す。

「……」

　彼女は無言でコップを受け取り、今度は少しずつ飲む。

「私は風見幽香。貴女、名前は？」

　空になった水差しをベット横の棚の上に置きながら女性は名乗る。

「…………」

　無言のまま俯いて答えない女性

「……まぁ、詳しい事を聞かれたく無いのなら深くは聞かないわ。誰にだって知られたくないことはあるでしょうし」

　無言の反応に怒った様子も無く、幽香は言う。

「ありがとうございます……。あの……私の着ていた服は？」

　女性は俯いたまま問う。

「ああ、あの服ね。所々破れてたから洗って繕っておいたわ。今貴女が着てるのは私の古着よ。洋服だけど我慢してね。」

「あ……ありがとうございます」

　ベッドに座ったまま頭を下げる女性

「あらあら、さっきから感謝されてばかりね。安心してほしいわ。」

　そう言うと女性は幽香の眼を見て安心した、という表情をした。その時豪快に女性のお腹が鳴る。

「ふふっ、何か持ってきてあげる。」

　幽香は笑いながらドアに向かって歩き出す。女性は恥ずかしそうに顔を赤らめてい

た。

◇

数日後

「蟲さん。だいぶ元気になってきたかしら?」
　幽香は女性の本名がわからないため、蟲と呼んでいた。
「はい、幽香さんのお陰で」
「それは何より」
　幽香は窓の外を眺めながら言う。外では雨が降り続いている。蟲が目覚めた日以降また雨続きの天気となっていた。
「幽香さん?どうかしました?」
　外を眺める幽香が険しい顔をしているのに気付いた蟲が問う。
「誰か来た。」
「えっ?」
「私の花畑に誰かが来ている。数人、それと小さな存在が多数、これは……虫?」
　それを聞いた途端に蟲の顔が強張る。
「まさか……そんな、バレたというの?」
　蟲の怯えた声に幽香が振り向く。
「貴女のお友達かしらね。」
　悪戯っぽく微笑む幽香。
「友達……でした。でも、意見の食い違いで……」
「対峙している、と。そう言う事ね。蟲の女王様」
　蟲が驚いた顔をして幽香を見る。幽香は相変わらず微笑んでいた。
「貴女のその和服にある刺繍、それは蟲の姫の模様よね。」
　そう言われて蟲の姫は絶句した。素性がバレていた。もしかしたらこの人が蟲の皆に知らせたのでは?そういう思考が脳裏をよぎる。
「あらあら、そんな顔しないでいいわよ。私は誰にも貴女の事言ってないわ。というか言う相手もいないし。ただ、知ってただけよ。蟲は花には大切な存在だから。」
　相変わらず微笑みながら話す幽香。その表情からして彼女の言葉に偽りは無いだろう。
「それで、何があったのかしら?蟲同士で」
　幽香は窓際の椅子に座って問う。
「一昨年は気候に恵まれ、虫の仲間は一気に増えました。ですが……昨年は気候が非常に悪く、植物が上手く育っていませんでした。」
　蟲の姫はゆっくりと話す。幽香は黙って聞いていた。
「食料が数と反比例していました。ですから、他の生物同様に虫もいくらかは死ぬ運命なのだと言いました、ですが……」
　蟲の姫は顔を俯かせて続けた。
「でも、あの子達は若いからそれが許せない。仲間を見殺しにすることが……だから今残っている植物を虫が独占しようと、喰い尽くしてしまおうと言い出した。そうしてしまったら、虫どころか全生物が滅んでしまう。」
　蟲の姫は幽香を見る。幽香は無表情で黙って聞いている。
「だから反対した。けれど……あの子達は聞く耳も持たず、裏切り者と呼んできました。誰よりも皆の事を考えいるのにっ……!」
　蟲の姫は眼に涙を浮かべていた。手で拭っても出て来る涙。
「そして、今回の梅雨。雨が例年より多い、多過ぎる。そのせいで今年も植物の育ちは良くない。そう思ったあの子達のイライラはピークに達し、ついに行動をおこしました。」
　蟲の姫は涙を拭いながら話した。
「……寝ている時に親友に殺されそうになりました。最高権力者であり、唯一反対意見を出す者が消えれば全てがあの子達の思うようにいくから……」
　止まらない涙を拭い続けながら言い終わる。それを見ていた幽香が立ち上がり、蟲の姫を抱き締める。蟲の姫という立場を背負う小さな背中を擦る。
「……ありがとうございます」
　人の温もりを感じ、安心した蟲の姫の涙を止まった。
「で、貴女はどうするの?このままここに居たら連中に何かされるんじゃなくて?」
「……逃げようと思います。すぐ追いつかれるかもしれないけど、ここであの子達と争って貴女に迷惑をかけたくない。」
　蟲の姫は俯き、重い口調で答える。
「……そう」

「すみません。お世話になったのに何も恩返し出来ないうえに面倒事に巻き込んでしまって……」
　蟲の姫は幽香に向かって頭を下げる。幽香は再び窓際に立ち、窓越しに外を眺めながら言う。
「別に構わないわよ。私は先日、腐って花の毒になったらいけないから異物をのけただけよ。それと、花畑に無断で侵入する輩をこれからお仕置しに行くだけ。」
　冷たい口調でそう言う。それを聞いて蟲の姫は顔をあげて幽香を見る。相変わらずの表情をしていたが、口元が緩んでいた。
「あ、ありがとうございます」
「何を感謝してるのかわからないけど、どういたしまして。そういえば裏口に捨てようと思ってた合羽があるのよね……」
　幽香は窓から眼を離さずに言う。それを聞いた蟲の姫は幽香の後ろ姿に何度も頭を下げた。
「あの……わがままなお願いかもしれませんが、彼女達を……殺したりしないで下さい。その……元ですが友達でしたので」
「気をつけるわ」
　幽香がそう答えたの聞いて、蟲の姫は裏口へと向かった。裏口の横に水色の合羽がかけてあるのを見つけて着る。蟲の姫には少し大きかったが、合羽を身に着けた蟲の姫は雨の中へと飛び出した。
　それを確認した幽香が動く。玄関の横にある傘を手に取る。
「蟲同士で争うなんて、何があったのかしらねぇ」
呆れたように言う幽香の表情は嬉しそうに笑っていた。久々に力を放てる楽しみに。

◇

　しばらくして、玄関のドアを叩く音が聞こえた。
「どちら様でしょう?」
「失礼、我々の姫が此所にいらっしゃるという情報を得て参りました。開けてもらえないか?」
「知らないと言ったら?」
　幽香が来訪者を馬鹿にするように言う。しばらくの沈黙の後
「我々蟲を舐められては困る。虫達の知らせで此所に居るのは明白だ。隠すというなら、ただではすまさん。手始めに近隣の花を我らが喰い尽くしてやるが?」
　強い口調で来訪者が叫ぶ。
「それは……許せないわね」
「そうであろう。我々も手荒な真似はしたくない、大人しく姫をさしだ……」
来訪者が全て言い終える前に幽香は扉を勢いよく開け、扉の前に居た来訪者の首元を掴み、押し倒す。
「教えてあげる。私の花畑に利となる蟲の待遇は、手厚くする。害虫の待遇は、処分する」
蟲を地面に押さえ付ける幽香は今まで以上に嬉しそうな顔をしていた。一方蟲は首から伝わる相手の力の強さに怯えていた。
「ぐ……貴様、ただではすまさんぞ！皆っ！」
　声を聞いて、花畑に隠れていた蟲達が姿を見せた。
「構わんっ！やってしまえっ！」
　蟲達の率いる虫達が空を埋め尽くす。それはまるで空に浮かぶ黒い川のようだった。
「……ここまで増えていたとはね。」
　幽香が呆れた声を出す。生態系を保つ為には今の数よりもっと減らさなければならないはずだ。しかし、蟲達は生き残ろうとした。
「これは、本当にお仕置が必要ね。」
　掴んでいる蟲を持ち上げ、横に投げ捨てる。そして持っていた傘を広げ、先端を虫達にむける。
「久々の力の開放だから、上手く調節出来るかしらね？」
　嬉しそうに語る幽香。次の瞬間、傘から黒い川に向かって巨大な一筋の光が飛んでいった。

◇

「な、な、な……？」
　幽香に投げられた蟲が口を開けたまま戸惑う。幽香の放った光が虫の川にぽっかりと大きな穴を開けたからだ。
「う～ん……だいぶ力落ちたわねぇ今じゃ巫女に簡単に負けちゃうかも」
「な！？これ以上力があったというのかっ！？」
　蟲のいうことを無視し、再び傘をむける。
「えいっ」
　軽快な掛け声とは裏腹に、光を放つ。今度はその光が左から右に動く。
「な、なんてことだ……数で勝てるはずの虫達がこうもあっさりと……」
　その光景に愕然とする蟲。
「圧倒的な数は圧倒的な力には敵わない、ということね」
　蟲を見下して幽香は言い放つ。蟲の表情は先程までとは打って変わって怯えきっていた。
「手荒な真似をすると脅した場合、される覚悟もあるからするのよ、ねぇ？」
　口元を緩め、満面の笑みで幽香は蟲を見つめる。
　蟲の表情は完全に凍り付いていた。

◇

　蟲の姫は水色の合羽を着て雨の中立ち止まって悩んでいた。
　蟲の姫である自分が花の妖怪に全てを任せて逃げてよいのか？蟲の権力者たるものが仲間をまとめれずに逃げてよいのか？否、それではダメだ。ダメに決まっている。自分がケリをつけないと。
　蟲の姫の足は来た道を引き返しいた。自分で自分達のけじめをつけるために。

◇

「お疲れ様」
　笑いながら幽香は倒れている蟲を足で小突く。蟲達は皆、蟲の姫が花畑に来た時のように満身創痍となっていた。
「うぅ………」
　死にはしないものの、立ち上がることは決してないであろうその様子に対して、幽香は傷一つ負っていない。
「虫達もだいぶ数が減ったわねー。この数なら残った皆生きられるんじゃないかしら？」
　黒い川は今や点の集まりとなっていた。幽香の圧倒的な力の前に虫達はことごとく潰されていったのだ。
「殺しはしないわ。貴女達の姫との約束だもの」
　閉じた傘で蟲の一匹をつつく。
「ぐあああっ」
　つつかれた蟲に激痛が走り声をあげ、顔を歪める。
「幽香さんっ！」
　その時幽香の背中から声が飛んできた。
「あら、お姫様。大丈夫、蟲達は死んでないわよ。まぁ虫は半分以下にさせてもらったけど」
　声の主、蟲の姫に向かって笑顔で返事をする。
「皆……ごめんなさい。」
「ぐうっ！黙れっ！この……この裏切り者っ！花の妖怪に我々を売り付けやがって……！」
「違うっ！違うの！そうじゃないっ！みんなのことを思っての行動なのっ！」
「黙れ黙れ！この……」
　全てを言い終える前に幽香が蟲を蹴る。
「黙って聞きなさいよ。」
　勢いよく蹴ったのか、蟲は悶え苦しんでいる。
「で、お姫様、貴女が戻ってきたからには何か理由があるのでしょう？」
　幽香が蟲の姫に問う。
「……蟲の一族は虫達それぞれの種族に蟲の妖怪がついていました。それゆえに気候が良くなって、個々の力が強まったから虫達が増えました。だから……」
　蟲の姫は一呼吸置いて蟲達を見る。
「虫の全て統べる者を創造して、その者に管

理をまかせることにしようと思います。」
　そう言って、倒れた仲間の元へと歩み寄る。蟲は姫を睨みつけていた。姫は蟲の上半身を起き上がらせて抱きしめる。
「ごめんなさい……許して下さいとは言えない。けれど、常にみんなの事を想って行動したつもりでした。」
　抱きしめた蟲に向かって言った後、耳元で何かを囁く。
「――――」
　その瞬間、蟲が淡い光に包まれ、蟲が小さな粒子へと変わった。その粒子は姫の体へとみるみるうちに吸い込まれた。
　蟲の姫は残りの同志も同様に吸収した。全てを終え、幽香に振り返ると彼女は何時の間にか傘をさしてこちらを見つめていた。
「あの……色々とありがとうございました。」
　蟲の姫は深く幽香に頭を下げる。幽香は無言で歩みより、蟲の姫を傘に入れる。
「この後は、どうするの？」
「……代わりの蟲の女王を創ります。その子に……全てを任せます。」
「全てを……ねぇ、その子が大変なんじゃないかしら？」
「虫の数は幽香さんが減らしてくれました。負担は少ないはずです。あと、自分たちの能力を全て合わせた子ですから、なんとかなるでしょう。」
「それで、貴女は？」
「その子に力を譲って、消えます。」
　蟲の姫は少し震えていた。
「死ぬのね。その子に全てを譲るために。」
「ええ」
「怖いの？」
「死ぬのは正直怖いです、が既に旅立った皆と、残った虫の為にも、自身を犠牲にしないといけませんから……」
　幽香は傘を手放し姫を抱きしめた。
「怖かったら泣きなさい。そうして消えなさい。」
「……ありが、とう、ございます。」
　姫は暫く泣いた。そして、彼女は何かを呟いた。
「――――」
　次の瞬間、二人の目の前には裸の幼女、新たな蟲の姫が誕生していた。
「この子……貴女に比べてずいぶん小さくないかしら？」
「力を弱めましたから……蟲がなかなか地位をあげることが出来ないように」
「そう……この子、名前は？」
「……リグル・ナイトバグ。決して力を高めず、蠢いて、夜に生まれた虫……リグル・ナイトバグ」
「いい名前ね。」
「ありがとうございます。……あの、ごめんなさい。もうさようならです。」
　蟲の姫の体は半透明で消えかかっていた。
「あの子を創りあげた時に既に力を注いであげました。だから……もう」
　姫が言い終わる時には既に彼女の体は光となり、消えた。
「……」
　幽香は光を暫く眺めた後、生まれた少女、リグルを抱きかかえ、家へと戻った。
「この子に合う古着があったかしら……」
　姫の艶やかな黒髪とは違い、自分のように緑色の髪をした少女を眺めながら歩く。
「服着せたら、後は適当に森に寝かしておいたらいいかしら……」
　消えた姫と瓜二つの少女の髪を撫でながら幽香は家の中へと消えた――

◇

「貴女が冥界に居るとわかったときは本当に驚いたわ。」
　差し出されたお茶を飲みながら幽香は呟いた。
「はは、まぁ自身が一番驚きましたがね。だって、死ぬのではなく存在が消えたはずなのに、冥界に来ることができるなんて」
　蟲の姫も椅子に座り、お茶を呑んでいる。
「冥界の姫様も粋な配慮をしてくれたわよねー。冥界に一軒家を与えてくれて、死んだ虫達の管理を任せるなんて」
「しかも幽霊蜂をはじめ、様々な幽霊虫を生きてる虫同様に現世に送り、蜜や花粉を集め

て冥界に帰ることが出来るようにするなんてね。」
「ちょうど虫の管理者がいなかったからじゃない」
　笑いながら幽香は答える。
「さて、長居しすぎたわね。そろそろ帰ろうかしら。」
　幽香が空になったコップを机に置き、立ち上がる。
「あ、そうですか。また蜜が無くなったらいらしてください。」
　虫の姫も立ち上がって幽香を送ろうとする。
「ありがとう。またね」
　幽香が虫の姫を抱きしめようとするが、幽香の手はリグルを貫き、空を掴む。
「ああ……そうよね、貴女死んでしまっているから」
「ええ、すみません。」
　よくみると姫は透けており、姫の奥にある景色が見えている。幽香は一瞬悲しそうな顔をするが、すぐに笑って
「また会いに来るわ。」
　そう言い残し、傘をさして家を出て行った。
　蟲の姫は一人残された家で外を眺めていた。
　彼女の頭の中には幽香と、自らの化身である娘。リグル・ナイトバグで埋め尽くされていた。
　自分の娘には決して会えない。会えたとしても抱きしめることはけっしてできない。わかることといえば、幽香から知らされる情報のみ。
　蟲の姫は窓に手をつき、幽香の立ち去った道を眺めていた。
　決して叶わぬ夢を想い続けていた。

（終）

〈作者コメント〉
　読んで頂きありがとうございました。合羽のイメージは一年前の月バグ表紙のリグルです。というかそれが書きたかったです。

あなうめ、小崎
ふぐの肝食っちゃった
見切れてるってば
イヌガミ作るよ
土砂くずれひどい
お宅のキャベツは全滅です！
もっかい冬眠してくる

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

無題
A.Kirima　p2

はじめまして。投稿しようと思い続けてはや一年。ようやく投稿に至りました。

虫とマルキュー　ゴールド
羅外　p29

今回、試験的にキャラのペン入れをイラストレーターでやってみました。

ホタルマントの妖怪少女(前編)
Step　p35～p38

諸般の事情で今回は前編です、前編はアクションシーンなしですが、後編はアクションシーンなので、また来月も見ていただければ幸いです

リグると！
ひどぅん　p39

湿度の低い地域での雪・霜はさらさらになるけど、
湿度が高いとべちょべちょになっちゃうんですよね。

drops
秋水　p40～p41

むっかし、泣き虫かーみさまっが～♪というわけで外はサクサク。中はしっとり。ノスタルジックな神さま作品（？）に仕上がりました。

preludenanoは『ルーミアと多々良小傘が間欠泉でお笑いコンビを組む物語』を書いたらいいよ。
preludenano　p42～p44

【禁止ワード：間欠泉は？】

リグルともこたんとゆうかりん
ぼこ　p46～p47

梅雨をテーマに考えてみたのですが、なんか違うような感じに・・・

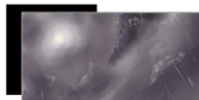
無題
草加あおい　p48～p49

梅雨といえば…何でしょう？　そんなわけで今回は随分ネタ出しに苦戦しましたｗ　相変わらずリグルさんが酷い目に遭う作風ですが、自分でも何故かはわかりませんｗ

雨々
キッカ　p50～p51

雨。リグル可愛いです。

停電で小まめな保存って大事だなと思ったリグチルの梅雨漫画
くらげん　p52

梅雨は正々堂々と引きこもれて便利ですよね。

明梅雨
斑　p75

梅雨の夜。少し薄くなった雲から月明かりが覗き、小雨の中を蛍が控えめに飛ぶ。
あれは現実だったのか、夢だったのか。未だに解りません。

表紙
小崎

はい、きつね。
あぁ、違ってる？じゃあ魔改造きつね。

月刊ナイトバグ　2010年6月号

2010年5月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌

編集後記

前回、例によってのスケジュールミスで余裕がなく、一周年らしい話をできなかったので、今回は多少趣のある話でも。と思っていたのですが、連続ミスで趣が夢散したでござるの巻。

というわけで、
主催がこんなでもまだまだいけるナイトバグ
ありがとうごめんね最近えびアレルギー発覚

2010 / 5/ 22　小崎

次号7月号は6月22日（火）発行予定！

※次号の投稿締切は6月15日(火)です。皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

月刊NIGHTBUG 2010年6月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

小崎　くらげん
preludenano
Step
キッカ
ひどぅん
ぼこ
秋水
草加あおい
如月翔
悠奈
ADDA
イリイチ
やにたま
異国の民
貴キ
蛍光流動
残虐非道の貴公子
怒羅悪
斑
悠木玲二
羅外
A.Kirima
NIGA
カカ男
しゃき・しゃき
モフパカ
東
豆板醤
Salka
夏樹　真
壁々